関西自然保護機構会報 *21*（*2*）：*301－338*，　*1999*

# ヨシと人の暮らしとの係わり

ヨシ研究所　西　川　嘉　廣

## RELATIONSHIP BETWEEN COMMON REED AND HUMAN LIFE

Yoshihiro NISHIKAWA *Institute of Reed Research*

### はじめに

今回の国際ワークショップの最終日にエクスカーション“近江八幡水郷巡り”が行われたが，筆者の生家は，見渡すかぎりヨシ原が広がるこの水郷の中心・円山町にあり，江戸時代から先祖代々この地に住み，主に田畑とヨシ地を所有する地主であった。戦後，農地改革により田畑のほとんどを失い，ヨシ地もまた干拓や琵琶湖総合開発などの公共事業のために収用され大幅に減少した。

亡父・西川嘉右衛門（号，嘉川）は，ここに暮らす生活者として，その実体験から琵琶湖におけるヨシ群落の重要性をいち早く感得し，個人的な利害得失を超え，生前，機会あるたびマスコミなどを通じ，ヨシの保全・増産の急務を世に訴え続けた。そのことは，父が遺した歌日記「まるやま嘉川日記」（1973；復刻本，1986）の随所にうかがわれるが，それらの中から若干の例を引用する：1月23日“葭生える湖（うみ）は自と清くなり濾過もはたせば魚もすむらん”，3月1日“よしと湖（うみ）因果の関係君知るや自然の恵みゆめ忘るなよ”，5月4日“水とよしふかきゑにしをとききかせ命の限り我は叫ばん”。

当地に産する江州葭（または円山葭）は，近江伝説によると，その昔，西川家の先祖が，伊勢の大神宮からもらってきた1株が増殖したものだそうで，このため「大神（だいじん）葭」とも呼ばれ，品質日本一を誇り全国に知られていた。しかし，琵琶湖の汚染進行に伴い，ヨシの質は年々悪化し，加えて，日本人の生活様式（特に住環境）の変化，安価な中国産ヨシの輸入，代替化学製品の登場などにより，近時ヨシの需要は激減している。

一方では，時代錯誤とみなされながらも亡父が強く望んだヨシ群落保全の重要性に対する認識が，今日ようやくグローバルに高まってきている。ヨシが内外の関心を今改めて集めている理由は，主として，水質浄化，生態系保全，景観形成，浸食防止（護岸）などの機能によるが，これらについては，この国際ワークショップで，それぞれの分野の専門家が報告されるので，本稿では，それらには触れず，“ヨシ原の現状と未来”を考える上で多少なりとも参考になればと願いつつ，かっては実用的にも精神的にも広く深かった“ヨシと人の暮らしとの係わり”について，それら以外の側面からとりあげてみたい。

### アシからヨシへ

ヨシとアシは，植物学的には同一で，ともにラテン名・*Phragmites australis*（Cav.）Trin. ex Steud.（旧：*P. communis* Trin.），英名・common reed に対応する和名である。現在では，ヨシを標準和名とし，アシはその別名とされているが，以

前は逆であった。アシが，“悪し”と同音なのを嫌い，“善し”に通じるヨシに変えたのである。(注. 琵琶湖水郷付近の葭業者は，ヨシとアシを区別している：後者は，おそらく前者の変種で，地上茎が中空でなく，質的・量的にほとんど利用価値がない)。

アシの語源については，①節のある茎という意味の“楷(はし)”の変化したもの，②草木のはじめという意味で“はし”の変化したもの，③“青し”の変化したもの，などの諸説がある。

「記紀」には，葦にまつわる国土誕生譚が記され，豊葦原瑞穂国とか葦原中国などという日本国の美称がみられ，葦原色許男(醜男)，可美葦牙彦神(宇摩志阿斯訶備比古遅神)が登場する。

万葉歌約4,500首中，植物を詠み込んだ歌は約1,500首を数え，万葉植物はおよそ150種類にのぼり，アシ(万葉仮名；蘆，葦，葭，安之，安志，阿之)を詠み込んだ歌数は，文献毎に多少異なるものの，一般に50首前後とされ，出現頻度では万葉植物のベスト10に入っている(参考. 萩142首，椿138首，梅119首，射干玉79首，松77首，藻74首，橘69首，稲57首，葦49首，菅49首，桜46首，以下略)。アシに因んだ動物名や地名(後述“地名”の項参照)，さらにはアシ関連語句が歌詞にはないが題詞中にはあるものなどまでをも含めて，筆者が数えたところでは，アシの万葉歌は67首(うち長歌は20首)に達する。なお，“あしひきの”の語源に関する諸説の中に“葦に関係あり”とするものがあるので，もしこの枕詞を用いた歌も加えるなら，“アシに因んだ万葉歌”の数は飛躍的に増えることになる。

いずれにしろ，「記紀」・「万葉」の時代には，ヨシという語はなく，平安末期の「住吉社歌合」(藤原俊成)には，“なにはわたりには，あしとのみいひ，あづまのかたには，よしといふ”，と記されている(現在，この使い分けは行われていない)。このことに幾分関連のある諺として，“葦も葭も浪華の事も言わぬぞよし”というのがあるが，これは(“葦”と“悪し”，“葭”と“善し”，“浪華”と“何やかや”をかけて)“良いの悪いのとあれこれ詮索しない方がよい”ことを意味する。また“難波の葦は伊勢の浜荻”は，“同じものでも所によって呼び名が違う”ことのたとえである。

ヨシ(アシ)の漢字には，古来，葭・蘆(異字体，芦)・葦が用いられており，「本草網目啓蒙」(享和3(1803))では，それらを“葭ハ初生ナリ，蘆ハ長ナリ，葦ハ已成ナリ，而シテ蘆ハ其総名ナリ”と区別している。しかし，今，この区別が厳密に守られているとは思えない。

### ヨシ生産業者の仕事；過去と現在

明治30年元旦に筆者の祖父(西川嘉右衛門；号，嘉祥)が筆を起こし，父が昭和初期まで補筆した「西川歳時記」には，家業に関する事項もあり，例えば大正6年現在の西川家壱ケ年間収入高概算の項では，年貢収米高と葭収益につき，“(自家用飯米を差し引くと)売却米は500俵となり，壱駄(2俵)14円としてこれによる年収は3,500円。葭の壱ケ年苅り揚束数(注. 1束は，切口から約1尺上での束周が3尺5寸(105cm))は，平年で14,000束，豊作の年は16,000束(注. 近時，葭刈束の標準束周は，3尺(≒90cm)とかなり小さくなっているにもかかわらず，刈束総数は5,000～6,000に減少)で，1束の価格を35銭とすれば売上実収は4,900円。葭苅賃は，大正五年十一月葭屋同業組合に於て三尺五寸束壱束あたり金壱銭五厘と定めた”由の記載がある。

ヨシ生産者の作業内容は，今も昔とほとんど変っていない。ヨシ刈初(かりぞめ)は，ヨシが枯れて葉を落す時期である12月の初子(はつね)の日に行うのが古来のならわしで，今でもこの日，

初刈りしたヨシ３本を三脚状に立て（多分，昔，米の豊作を願い，ヨシを稲に見立てて神の依代としたことに関係），神棚には，旺盛な繁殖力の象徴として，二股大根を供え，同時に家伝の“二股大根と鼠”の木彫を飾り，ヨシのいやます増殖を祈念する。

葭刈りは，３月下旬頃まで，“刈り子さん”により手鎌で行われる（機械化も一部導入されているが，重機がヨシの根茎を傷めるなどの理由から一般的ではない）。刈り取りが終ると，“ヨシ地焼き”が実施されるが，これには，ヨシを休眠から覚醒させ，ヨシの害虫を防除し，できた灰が肥料となる，などの効果がある（ヨシの育成には，化学肥料，防虫剤，除草剤の類は，昔からまったく使用されていない）。この“ヨシ地焼き風景”は，早春の水郷の風物詩でもあり，近年，近江八幡市は“ヨシ焼き祭り”というイベントを催し，観光客の誘致ならびにヨシの重要性のアピールに努めている。

刈束（葦荷）は，選別作業のため“葭場”（よしば）に移送されるが，これを“葭引き”といい，これには今も主として昔ながらに田舟（葦舟，葦小舟，葦刈小舟）が利用されている。葭引きで昔と変わった点といえば，舟に強化プラスチック加工が施され，船外機が取付けられるようになったこと，また農道整備に伴い一部でトラックによる搬送も行われるようになったことぐらいである。

葭場に運ばれた刈束は，円錐状の“丸立て”にして，風乾させたあと，先ずヨシを長さによって仕分けする“段抜き”（または“葭抜き”）作業に付し（普通，12尺以上，11～10尺，10～９尺，９～８尺，８～７尺と１尺（30cm）きざみに分別していき，最後に６尺以下のものを“抜き下”としてまとめる）。次いで用途に応じて品質により，一本一本のヨシを手作業で選り分ける。この選別作業では，曲がり・虫食い・しみ（真鍮色の斑点）のあるヨシをはね，太さを揃え，さらに葉鞘に途切れのある“赤口葭”，途切れがない“白口葭”，葉鞘を付けたまま使用する“皮付き葭”に分けるが，これには相当な熟練を要する。選別技術者は，刈り子さんも同様であるが，ほぼ全員高齢化しており，後継者問題が年々深刻さを増している。

５月中旬に丸立てのヨシがすべて倉庫内に納まると，その日を“葭仕舞”（よしじまい）と称する。「西川歳時記」には，“葭苅初”および“葭仕舞”の日の諸行事につき，詳しく記載されているが，少しだけ紹介すると，例えば大正12年度の葭仕舞は５月１日で，恒例により従業員慰労の宴を自宅で催し（注．今は外食），勤勉度に応じて白木綿を支給したとの記述に続き，“葭仕舞の馳走了レバ下男ハ右馳走ヲ親里へ持チ帰リ一泊ナシ翌日帰宅ス　親里へ帰ルトキハ右ノ如ク餅ヲ壱重宛持シ帰ラス事例ナリ　故ニ翌日ハ一家休ミトス”と記されている。

### 蘆年貢

ヨシ原が，その昔，いかに大きな経済的価値を有していたかをうかがわせる一つの証左として，ここで“葭年貢”をとりあげる（中国にも蘆田の地租（luke）があった）。

江戸時代に野高（原野にかける年貢）の一種として，蘆野（川原や沼地周辺の空地で，野生または植栽したヨシが生えている場所）に対しても，反別を改めて一反に何程と蘆年貢（蘆高，葭高，蘆役）を課すか，もしくは反別を改めず蘆野役，蘆野運上などの名で税が掛けられたことが，「地方凡例録」の“蘆年貢，蘆役，是は野方浜方などにて立毛仕付ても水場作毛不生立場所蘆植付，一反に米何ほどと上納する也”，“蘆野は川筋沼地等に有之，是又かや野同然反別有て，一反何程と年貢納るも有，又は無反別にて役永運上等差出すも

ある也" という記述から明らかである。琵琶湖でも，織田信長が安土に築城したころ，葭年貢を納めさせたことが，「沖ノ島文書」に記録されているという。

葭年貢にまつわる話が，海音寺潮五郎（1975）の「武将列伝　五」（文春文庫）に収載されている小説「石田三成」の中に出ているので，その部分を引用しておく：古今武家盛衰記に，秀吉が彼に五百石の禄をあたえたところ，彼は，「宇治川と淀川の両岸に繁っている葭葦（よしあし）は，郷民共が勝手に刈りとってしまうが，これから運上をとる権利を拙者におあたえ下さい。お許したまわるなら五百石は返上いたしますばかりか，事ある時には一万石の軍役をつとめるでありましょう」と願った。秀吉がこれを許すと，三成は一町歩につきいくらと運上を定めて郷民共から徴収し，その後信長が丹波の波多野氏を征伐する時，秀吉も出陣したが，三成はちゃんと数百騎をひきいて従ったという話を伝えている。名将言行録はこれを採用しているが，信じられない。秀吉が信長の一部将あった時代この地方を支配したことはないのである。三成が少年時代から才知抜群であったことを語ろうとしてのフィクションであろう。あるいは明智をほろぼした山崎合戦後，秀吉が一時山崎の宝寺に居城していたことがあるが，その頃の話がまぎれこんだのかも知れない。そうだったら一応筋道は立つ。

## 用途の概況

良質のヨシを増産するためには，またヨシが水質浄化機能を果たすためには，毎年のヨシ刈りが必須条件である。それ故，需要先細り傾向の現況において，収穫されるヨシをいかに活用するかが，極めて重大な検討課題になっている。

わが国におけるヨシの伝統的なヨシの利用途は，a)［漸減しているものの，いまだ主要な需要があるもの］として，①簾（社寺・茶室・座敷用の御簾や日除け用立簀のほか，茶・寒天・海苔・椎茸などの生産・加工の過程で用いられる葭簀），②建具・家具（葭戸・衝立，葭棚など）の素材，③屋根葺き材料や垣根（葦垣，葭垣）・天井（葭簾天井，網代天井）・壁（壁心）・窓（葭窓）などの建材，④雅楽の篳篥の芦舌，⑤火祭り用松明が，またb)［かっては需要があったが，今ではほとんど代替品（プラスチックなど）にとって替わられたもの］として，①毛筆の筆鞘（蒔絵筆用のみは，今もヨシ製）や②漁具（えり・簗・もんどり・たつべ）の素材（注. 滋賀県草津市北山田には，葭巻網漁という独特の漁法がある），などがあげられる。なお，後でふれるように，ヨシは古くから食材（備荒植物），薬材，燃料としても役立ってきた。

戦後，開発されたヨシの新規応用としては，①水田の土地改良工事で，暗渠の目詰まり防止のために適用，②リード・クロス（葭つづれ）製品（ヨシ稈を縦方向に割いて得た薄片を糸で反物状に編んだものがリード・クロスで，これを色紙掛け・短冊掛け・敷物などの工芸品や天井・壁面用の建材などに加工），③ヨシを利用する浄水設備（ドイツで開発され，諸外国では既に多数が稼働中），④機械漉きヨシ紙の製造（次項 "化学的応用" 参照），などがある。その他，目下商品化が検討されている用途としては，腐葉土からの肥料（特に，菊作り用に好適），照明器具・リース（花環）などのインテリア用品，葦ペンやヨシ笛，陶器の釉薬，草木染の染料，などがあげられる。

## 化学的応用

### 1) 世界の研究概況

アメリカ化学会発行の「Chemical Abstracts」

(以下「CA」と略記) の Vol.36 (1942) ～Vol.129 (1998) につき，*"Phragmites"* および "reed" をキーワードとして検索したところ，総計 1124 報 (うち Review は 23 報，Patent は 89 件) が得られた。これら報告を発表国別にみてみると，旧ソ連 182 報，ルーマニア 158 報，旧西ドイツ 98 報，中国 79 報，米国 67 報，日本 67 報，英国 64 報，韓国・北朝鮮 33 報，フランス 27 報，ハンガリー 25 報，オランダ 23 報，旧チェコスロバキア 21 報，オーストリア 20 報，カナダ 19 報，ポーランド 19 報，エジプト 15 報，オーストラリア 15 報，スウェーデン 14 報，デンマーク 14 報，インド 13 報，スイス 11 報 (以下略) の順になる。

また，これらの報告を研究領域によって分類すると，＜製紙＞410 報，＜水質浄化＞403 報，＜植物化学・植物生理学＞301 報，＜成分＞190 報，＜建材＞37 報，＜飼料＞36 報，＜発酵＞20 報，＜燃料＞15 報，＜生理活性・医学＞13 報，＜活性炭＞5 報，＜掘削＞2 報，＜肥料＞2 報，＜染料＞2 報，＜吸着剤＞1 報，＜滑剤＞1 報となる (複数領域にまたがる報告がある)。

「CA」から得た情報の全般的解説は，別の機会にゆずることにし，本稿では，「CA」収載報文やそれ以外の文献・資料をもとに，化学的応用のうち，＜製紙＞と＜燃料＞についてのみこのあと簡単に述べる (付記．＜建材＞領域では，断熱材やヨシとセメントやプラスチックとの複合材に関する研究が多い)。

### 2) 製紙

森林破壊，それに付随する地球温暖化現象の観点から，近時，各種非木材製紙原料の利用に世界の関心が集まりつつある。代表的な非木材パルプ原料としては，パピルス，ケナフ，ヨシ，バガス，タケ類，藁類，ジュート，亜麻，マニラ麻，サイザル麻，コットン，楮，三椏，雁皮などがあげられるが，この中で現今特に注目されているのは，それらの水質浄化機能と相俟って，ヨシとケナフとである。

上掲の如く，過去数十年間の「CA」に収載されたヨシパルプ関連論文の総数は，400 余報に及ぶが，発表国別内訳は，ルーマニア 128 報，旧ソ連 69 報，中国 51 報，韓国・北朝鮮 23 報，旧西ドイツ 21 報，フランス 12 報，エジプト 11 報，米国 10 報，インド 10 報，ハンガリー 7 報，日本 6 報，フィンランド 6 報 (以下略) である。Wilson (1966) の探訪記によると，当時，ロシアでは，4 カ所のヨシパルプ製造工場が操業しており (セルロースの潜在的供給量は年間 5000 万トン)，ルーマニアにもヨシパルプ工場が存在していた。

ヨシ紙製造に関連して，筆者の家に興味深い資料が残っている。それは，「南朝鮮製紙株式会社定款 (大正 11 年 7 月 25 日改正ノ分)」であって，その第一章　第三條において，事業目的を，"一，芦草ヲ原料トスル「パルプ」ノ製造；二，各種紙ノ製造；三，芦草ノ栽植；四，以上ノ目的ヲ達スルニ必要ナル附帯事業" と明記している。ただ，残念なことには，大正 13 年 (1924) 5 月 7 日付けで，この会社 (本店所在地，朝鮮慶尚南道) より筆者の祖父宛に送られた親展 (芦紙の見本在中) には，"(略)。偖テ弊社製品芦パルプニ付御照会ノ趣キ難有誦仕リ候　右ハ大正四年以来神戸鈴木商店ニ於テ苦心研究ノ結果完成セラレ候モノニ有之上等印刷紙抄造ノ必須原料トシテ広ク製紙界ニ賞用セラレ居候モ何分原料芦草不足ノ為ニ大量製産ニ適セズ事業経営上困難少ナカラズ候ニ付前年右芦パルプニ□□ (注．2 文字判読不能) 其他ノ製紙原料ヲ配合シテ優良紙ノ抄造ヲ計画スルト共ニ株式組織ニ変更シ爾来調査研究ノ歩ヲ進メ根本的工場改築ノ準備中ナルモ昨年ノ震災以来一般経済界不安ノ状況ニ鑑ミ一時工事延期ノ止ムナキニ立至リ候ハ誠ニ遺憾ニ堪ヘサル処ニ有之候　右ノ

通リノ次第ニテ目下芦パルプ製造モ中止致シ居リ候モ其内前記計画遂行ト共ニ再ビ製造開始ノ筈ニ有之候間今後共御援助御用命ノ程希上ケ候（略）。”と記されており，その後，本件の交渉は進展しなかったようである。しかし，上記交信から75年が過ぎ平成時代を迎えた今，祖父が抱いた工業的ヨシ紙製造の夢は，ここ数年ボランティアとして琵琶湖の水質浄化の問題に取り組んでいる筆者の義兄・宮地潔（ヨシ紙研究所・所長）の努力の結果，ようやく現実のものとなりつつあり，独特の風合いをもつ“びわ湖ヨシ紙”が誕生している。なお，手漉きヨシ紙制作の名人・平山一造氏が，大津市に在住されていることを書き添えておく。

### 3）燃料

「CA」の抄録から得た1980年代以降の“ヨシの燃料への応用”に関する情報をを以下に略述する（＜　＞内は「CA」の抄録文登録番号）。ドイツでは，①“石炭粉末燃焼ボイラー内でヨシなどのバイオマスを燃焼させるための方法と装置”につき特許＜122-13550s＞が成立し，②Otto-von-Guericke大学において，“液化床内での石炭-バイオマス（ヨシなど）混合物の燃焼”＜124-237041f＞が検討され，また③Stuttgart大学において，“ヨシなどの生物燃料の生活環分析”＜127-37003v＞が報告されている。ハンガリーでは，“ヨシや農業廃物・石炭（もしくは褐炭）・結合剤を混和後加圧することによる無毒性かつ無煙性の練炭状固形燃料の製造法”の特許＜110-234538y＞が，またオーストリアでも，“ヨシなどを原料とし，これに結合剤と脱色・脱臭添加剤を加えることによる練炭状合成燃料の製造法”の特許＜100-54542e＞が提出されている。イラクでは，“ヨシなどのバイオマスを炭化水素類へ連続的に変換させ燃料とするための閃光熱分解システム”＜108-207626c，106-159487t＞が研究され，また日本（大阪市大理学部）でも，“ヨシなどの草本や農業廃物を基質としたメタン発酵による生物ガスの製造”＜107-158173w＞が報告され，ルーマニアでは，“ヨシやその他の農産物を原料とする燃料製造のポテンシャル”＜105-118068t＞が検討されている。

次に，“ヨシと燃料との古い係わり”について，少しふりかえってみたい。古典に出てくる［葦火（あしび，あしひ，あしふ）］は，①葦刈りの人が，暖をとるために刈った葦を燃やす火，②燃料用に干した葦を燃料として焚く火，をさす語で，秋の季語とされ，「万葉集」の“難波人葦火焚く屋の煤してあれど己が妻こそ常めづらしき”（作者未詳）がよく引例にあげられる。筆者が子供の頃には，自宅の“おくど（置所）さん”（竈）にヨシ屑をくべて炊飯が行われていたが，炊きあがった江州米のおいしかったことがなつかしく思い出される。なお，船山馨の小説に「蘆火野」がある。

ヨシは，古くから内外で，灯用素材にも利用されてきたが，「灯用植物（ものと人間の文化史50）」（深津，1983）から，関係記述を引用する：①［烽火（燧）（とぶひ）］は，飛ぶ火の意味で，古代，内乱とか外敵侵入に備えて，全国各地に設けられた非常警報用の施設で，昼は煙を，夜は火をあげて警報や信号とした。アシは，これの燃料用植物として役立ってきたのであり，「軍防令」の巻十七に，夜の「とぶひ」は，乾いたアシを心にしてこれを乾草で巻き，さらにその周囲に肥松を何本もはさみこんだものを用いると記されている。おそらく中心にアシを置いたことは，通風を良くし，乾草燃焼を助けるためで，最初乾草に点ぜられた火が，アシの茎の中を吹き抜ける風にあおられ火の手を増し，次第に周囲のマツに移り，高く焔をあげたものと考えられる。②ローマ人はパピルスやアシなどの植物の茎葉を束ね，それに蜜蝋を塗って蝋燭を作ったといわれ，プリニウスは，

その著「博物誌」に，ローマ人がこの種の蝋燭を主として寺院において使用した旨を記している。③慕容が案出した中国の墳燭（大燭）の製法は，アシを中心にして布を巻き，蜜を注いで唐代の蝋燭のようにしたものだという。ローマ時代の蝋燭と軌を一にしており，当時における東西文化交流の跡を物語っている。④「本朝世事談綺麗」に，“唐ろうそくは，真に葭を用いる。よって折としては立消のあるものなり。本朝の人これを考え燈芯を巻きて真とす，はなはだ上品なり”とある。

蝋燭の話が出たついでに，ここで，“ヨシと照明”に関する最近の報道（「読売新聞」，1994年，12月5日）を紹介する：琵琶湖に生えるヨシを照明素材に利用した「葦のあかり展」が，10月と11月に大阪と大津市内で開かれた。小久保和美さん（大阪府豊中市）のオブジェ「あかりじゅずつなぎ」は，一本の細長いヨシに裂け目を入れ，膨らみを持たせたざん新な発想が評判を呼んだ。

## 占い・呪術との係わり

### 1) 葦占（あしうら）

神社で，正月15日に小豆粥を作る時，葦，茅，または竹を入れて炊き，その管の中に入った粥または小豆の数によってその年の五穀の豊凶などを占うのが粥占（筒粥，管粥）の神事（本来は民間習俗として集落共同で，あるいは各家で行った年占）であり，管として葦を用いた場合，葦占という。柳田国男は「年占の二種」の中で，“三河八名郡の石巻神社も亦管粥穀占を以て有名な社である。期日はやはり正月十四日夜の祭で，神前に竈（かま）をすゑて二升の白米を粥に煮，六七寸に切った蘆を十八本，一本々々に印をして紙捻（こより）を以て結び合せ，これを粥の中に投じて夜の八つ時から夜明に至り，後にこれを取出して粥のつまり具合と色合とを以て，それぞれの作物の豊凶を占う”と述べている（「遊びの大事典」（増田，1989）より引用）。

葦占は，現在でも行われており，例えば，京都市内元総社町に鎮座する総社神社（別称，明神様）では，“筒粥の神事”（“御筒粥式”）と“火炭式”（“置炭式”）が430年前から続いている。御筒粥式では，もち米の粉を煮た鍋の中に，約12センチに切ったヨシの茎24本の束を春・秋用として二束入れ，夫々の茎の中に入った粥の量を調べて豊作度を占い，また併行して行われる置炭式では，12カ月の晴雨を占なう。ただ，この二つの神事も今では農家が激減したため，1月14日の深夜より15日の未明にかけて，神社関係者だけでひっそりと執り行われるとのことである。（インターネット情報，1999年）。

葦占の語が，“葦の葉を以てする古代の占法”の意味で用いられる場合もあり，これに関し「神道大辞典」（下中，1990）に次の内容の記載がある：①「新撰姓氏録」に此の占法を世職としたらしい葦占連の名があり，後世にも所伝（筆者注．後述“人名”の項にみられるように，葦占（あしうら，あしうらい，あしのうら）姓は今もある），②「甲子夜話続編」からの引用，“享保二年遠江國の船頭甚八郎が南東海上の無人島に漂着して帰国する時，水垢離を取って伊勢大神宮初め諸神に祈念を凝らした後，三十枚の葦の葉に一から三十までの数字を書き別け，伊勢の御祓札を其上に擦りつけると，九の字を書いた葦の葉が附著して上ったので九日出発と定め，無事に帰還し得た由。”

### 2) 古代インドの前兆占い

「ブリハット・サンヒター（Brhatsamhita）」は，六世紀インドの占星術師・ヴァラーハミヒラ（Varahamihira）が，“自然界の現象に通常と異なる兆候がみられるとき，それを前兆と解釈し，吉凶を判断した”占いの書であるが，その訳注書

(矢野・杉田, 1995) から，葦 (シャラ ; sara) に関係がある事項を引用する：52章95＜土地の選択＞：[またこの] 順にクシャ草のある土地，葦の茂った土地，ギョウギシバ (ドゥールヴァー) のある土地，カーシャのある土地がよい。53章113＜マヌ説＞：あるいはまた，モークシャカの灰を入れて煮立たせ，葦の灰を混ぜ，七回振りかけるべきである。火で焼いた岩盤を割ることができる。85章76＜鳥獣の場所による吉凶＞：方位盤を三十二方位に分けるとき，木・椰子・割り竹・衣，水生植物・葦・皮・細布の線が [それぞれ順に] 三十二方位の方位盤の [四] 方位 [ずつ] に割当てられる。94章5＜カラスの鳴き声＞：[カラスの巣が] 葦，ダルバ草，潅木，蔓草，穀物，神殿，家，窪地にあれば，その土地は盗賊，旱魃，病気に悩まされ，無人になる。

### 3) 日本の俗信

①椋鳥葦切百舌を殺すと馬が暴れる [岩手県] ; ②目腐りは便所の神様に葦の葉を供えて拝めば治る [香川県] ; ③葦の葉に節が一つあれば一回二つあれば二回三つあれば三回洪水がある (「故事・俗信　ことわざ大辞典」(尚学図書 (編集), 1982)) より引用)。

### 4) 南米大陸の呪医

1990年4月6日の「週間朝日」の巻末グラビアに，＜南米大陸　呪医と西洋医＞の題で次の内容の関野吉晴のルポが掲載されている：ヤノマミ族の呪術師 (医者でもある) は，病気や死が悪魔ヘクラにとりつかれることによって生ずると信じていて，かれらは，マメ科の木の皮を灰にした幻覚剤ジョボを，アシで作った1メートルほどの細長い筒を使って鼻に吹き込んでもらい，幻覚状態となって，敵対する集落の呪術師が投げつけたヘクラと戦い病人を直したり，また逆に，敵の村にヘクラを送り込む。

## 神事との係わり

### 1) 湿原祭祀

「湿原祭祀　第2版 (ものと人間の文化史　24)」(金井, 1977) には，“古代の湿原信仰”，“湿原聖地の成立”，“豊葦原の瑞穂国--湿原国家の形成”，“湿原聖地の展開”，“聖地と祭場” などとヨシとの係わりについて論考されている。ここでは，同書から特に興味深い箇所を引用しておく：①以上日本古代の湿原聖地は，近世におけるほどはっきり機能分化していたわけではないが，奈良時代すでに土地神の象徴，農耕儀礼の祭場として，成立していたようにおもわれ，それが日本神話に示されるような「浮かぶ葦原」という国土観を生む一つの要因となったものであろう。仁明天皇の嘉祥2年 (849) の奉賀の長歌にも「日本 (ひのもと) の

やまとの国は　かむろぎの　すくなひこなが
葦菅を　殖えしつつ　国固め　作りかむより」とあって，湿地のシンボル，アシやスゲがまた国土の象徴のように詠われているのである。②剣状の形をもつ葉の植物は，魔除けの働きをもつと信じられたものが多く，三信遠の国境地方におこなわれる有名な花祭のさるごばやしの歌詞にも，「(前略) 笹の葉は　とよ笹の葉は　けんつるぎにもさも似たり　竹の林が高きとて　天竺天までとどくかよ　御前のほとりに芦うゑて　見る人ごとによしとこそいへ　(中略)　池の菖蒲がたらりらと
根こそ白けれ　らりうらや　かりやの菖蒲がちらゆらと　葉こそ白けれ　らりうらや」。つまり，この歌のなかには，タケとアシとショウブが歌いこまれている。③縄文時代にも，湿原聖地らしいものの存在したことが，判明しつつある。(略)。八戸市の是川や津軽地方の亀ガ岡の泥炭層遺跡が，かってスゲやアシの茂る湿原時代に残された祭祀

的な遺跡であったとすると，その祭祀目的は一体なんであったろうか。縄文時代は狩猟，魚撈，採集が主な生活手段であったから，動物の多く集まる湿原の沼神へ，貴重な祭器が奉賽されたということが，まず考えられる。(略)。また近世のアイヌ人の生活から想像すると，ヒシやジュンサイなどは良き採集食料でありアシやマコモの若芽も食用にされたことであろうし，その湿原の池沼が海近く，川が流れだしていれば，季節には，サケやマス，そしてシシャモなども川をさかのぼってきたにちがいない。古代の聖地や祭場発生の重要条件が，一つには，人の生命を育むのに有利な環境，「生命の土地」であることは，すでに多くの実例をみてきたところで，それは縄文時代でもおそらく同じであったろう。(略)。スゲ，マコモ，アシ，オギ，ススキ，チガヤなどは，古代の住居，家具，道具の材料として多く利用されたものであった。(略)。馬や牛などの家畜の飼料としても，これらの草は重要なもので，放牧場や牧草地となり，村の共有地とされている草原も多かった。縄文時代の日本として，イネ科やカヤツリクサ科の植物がもっとも手近に得られる材であったことはたしかである。

### 2) 葦の神社・寺院

各種の参考書（金井，1991；志賀，1989；下中，1990；三浦，1977；日外アソシエーツ株，1989）から採録した“アシ（ヨシ）に因んだ神社・寺院名”を以下にあげ，簡単な注記を付した。

#### a) 神社

[葦神社（伊賀・山田；三重県)] 芦の生える湿地や水辺に稲が生えることを知った古代人は芦をも信仰しこれを祀った。[阿志神社（尾張・渥美；愛知県)] 阿志は芦。祭神，(諸説の一つとして) 阿志神。[葦男（あしお）大明神（鳥取県八頭郡)] 犬山神社。[芦処（足鹿）神社（但馬・朝来；兵庫県)] 芦処（あしか）は，芦の茂る処（「か」は処の義)。飛鳥はアシカの転で同義。[阿自賀神社（伊勢・河曲；三重県)] アジカはアシカ（足鹿＝芦処）の濁音化。[阿自岐神社（近江・犬上；滋賀県)] アジキはアシキ(芦村）→アジキ（阿自岐)。岐は村の古語。[足前神社（近江・伊香)] 足前（あしさき）は芦先で，芦の穂。祝山の社。山に芦が生えていたのを祀った。[葦田神社（但馬・気多；兵庫県)] 芦田は芦の交っている田。今は美田。[足高（葦高）（あしだか）神社（備中・窪屋；岡山県)] 高く茂った芦（足）を祀り，稲の成長を祈った。祭神，大山祇命（相殿，石長比売命・木花咲耶姫命)，一説に葦那陀迦神。[葦立弖（あしだて）神社（三重県)] 皇大神宮（三重県伊勢市；祭神，天照大神）末社の一。祭神，五移良比女命（いつやらひめのみこと)。[足坏神社（駿河・安倍；静岡県)] 足坏（あしつき）は芦村，ツキは日鮮共通の古語スキの訛。[阿志都見（あしつみ）神社（近江・高島；滋賀県)] 阿志は芦，都見（つみ）は神。[足見田（あしみた）神社（伊勢・三重；三重県)] 芦水（み）田で芦の生えている水田。当社の神田はアシミ田の転語でオシミ田という。[阿須伎（あすき）神社（出雲・出雲；島根県)] 阿須須伎の一つの須が落ちた語で，芦村。[阿須々伎（あすすき）神社（丹後・何鹿；京都府)] アススキは芦村で，アスは芦（アシ）の訛。スキは村の古語で朝鮮語に由来。[足羽神社（越前・足羽；福井県)] 足羽（あすわ）は芦葉。稲の豊作を祈った社。[与喜比古（よきひこ）神社（能登・能登；石川県)] 与喜郷は邑知潟に臨み芦が生えていた芦村であったらしい。芦（悪し）を忌み，善き＝与喜とした。[与佐伎（よさき）神社（但馬・城崎；兵庫県)] 円山川に支流の合する付近にあるから芦が生えていたらしく，氏子の村を芦村といった。伎は村。芦（アシ）を善しに改め，あし村→よし村→よさ

村となる(三母音時代の交代)。[葭原(あしはら)神社(三重県度会郡)] 皇大神宮末社の一。祭神,佐佐津比古命(ささつひこのみこと)・宇加乃御玉御祖命(うかのみたまいんおやのみこと)・伊加利比女命(いかりひめのみこと)。[葦原神社(鳥取県東伯郡)] 別名,新宮さん。祭神,伊弉諾尊・事男命・速玉男命・日本武尊・大山祇命,ほか。茅の輪くぐり,7月30日。[芦別神社(北海道芦別市)] 祭神,天照大御神。[芦屋神社(兵庫県芦屋市)] 祭神,天穂日命,ほか16柱。[葭島(よしじま)神社(石川県小松市)] 祭神,倉稲魂神・大田神・大宮女神・火結神。[与須奈(よすな)神社(越前・足羽;福井県)] 芦の→よしな→よすな(なはのの古語)。日野川に足羽川が合する所にあったから,もとは芦村であったらしい。

b) 寺院

[芦浦観音寺(あうらかんのんじ)(滋賀県草津市)] 天台宗。[芦原妙見さん(あわらみょうけんさん)(福井県芦原町)] 妙見寺。単立。[芦山寺(ろさんじ)(長崎県南松浦郡)] 曹洞宗。

**3) 蘆苅(芦刈)神事(あしかりのしんじ)[御葭(みよし(の))神事,神葭(みよし)刈りの神事,蘆の神事,御葦(みよし)流し]**

「神道大辞典」(下中,1990)の"蘆苅神事"の項には,次の説明がある:4月乃至6月の間に於て所々の神社に通有の神事。①氏子等思ひ思ひに蘆を刈り取り来って之を氏社の神に献供する神事。②刈集められた蘆を神職が祓い清めた後河川湖海の水面に流し,其漂着地点を神意に適した處として其地に仮殿を造り,漂着した蘆は之を「御蘆」と唱へて恭しく奉斎する神事。

この神事で最も有名なのは,津島神社(愛知県津島市)の津島祭(天王祭,津島川祭とも)で,悪疫を払うため,陰暦6月14日の夜,神葭に疫病神を託して天王川(今は池)に流し(御葦流し神事),その流れ寄った所に疫病がはやるとされ,その地では発見者を施主に祭を行なう(愛知県の海岸には,この漂着地にまつわる伝説や,漂着を記念した地名が多く,御葦天王社などの名で神社に祭られた例もある)。この信仰は,津島神社のほかにも,名古屋市の熱田神宮や豊橋市の牛頭天王(ごずてんのう)社,大阪の三輪神社(和泉三輪社)など,各地でみられる。

**4) 魔除け**

**a) 葦こう(いこう)[葦索(いさく,あしなわ),蘆索(ろさく),あしの縄]**

「字統」(白川,1984)に,次の説文がある:韋にはものを束ねてくくる意がある。葦をつかねて綱の形に作った"葦こう"は,夏至の日に門に飾って,邪気を祓うのに用いた。また縄の形にした"葦索"は,神荼(しんと),鬱塁(うつりつ)の二神が鬼を捕えるときに用いる縄で,歳晩の夜に鬼やらいをして,門戸にかける。また蓆に編んだ"葦蓆(いせき)"は,喪葬の礼に用いる(筆者注.蘆弊(ろへい)と呼ぶ葦などを編んだ敷物も,儀式の際,地面に敷き,人々の座や物の置場に使われた)。葦の神を"葦姑(いこ)"といい,旧正月15日の節日である上元の日に,婦女がこれを祀って一歳の吉凶を卜した。草を束ねるということに,民俗的な意味が含まれているようである。

b) 茅の輪(ちのわ),粽(ちまき)

茅の輪は,茅(ちがや;ヨシやススキ)を束ねて大きな輪の形に作ったもので,6月晦日の大祓(六月祓(みなづきばらえ);夏越祓(なごしのはらえ))に各地の神社(例.京都府では,八幡市の石清水八幡宮や貴布禰総本宮・貴船神社,石川県羽咋市の気多大社)で,これを鳥居のところなどに立て,参拝人は"茅の輪くぐり"をして半年間

の罪や汚れを払い清め，残る半年の無病息災を祈る。この神事は，ヨシなどの強い生命力を信仰に結び付けたものであろう。

粽は，糯米粉・粳米粉・葛粉などで作った餅を長円錐形に固めて，茅・笹・真菰などの葉で巻き，藺草で縛って蒸したもので，端午の節句に食べる（蘆粽については，後述“食文化との係わり”の項参照）。京都の祇園祭は，貞観11年（869）に疫病が大流行した際，世人がこれを牛頭（ごず）天王の祟りとし，それを祓うために行われた祭事に由来するが，今も配られる“祇園祭のちまき”の紙袋には，以下の説明が書かれている：元来「ちまき」は，和名「茅まき」で，茅に特別な霊性を認めた日本古来の考え方から，厄難消除のために，門口につるしたものです。毎年祇園祭になると新しい「ちまき」に取替えるのがならわしになっているようです。この「ちまき」は，もともと，おはらいの信仰から生まれたものですが，同時に京都の風物詩でもあります。

**c）破魔矢（はまや）**

破魔矢は，破魔弓（浜弓）と呼ばれる魔障を払い除くという神事用の弓につがえて放つ矢のことであるが，今は正月の縁起物として神社でこれを出す（季語，新年）。京都平安神宮の破魔矢には，次の説明文が付されている：古来，葦はその生命力と浄化作用から厄除けの力があると言われております。当宮の神矢はその故事に因んで調製いたしました。「初詣開運厄除」の祈念を込めて皆様方に授与いたしております。

**d）追儺（ついな，なやらい）；鬼遣らいとも）**

中国に始まり，わが国には7世紀末に伝わった宮中年中行事で，大晦日の夜に悪鬼を払い疫病を除くため，殿上人が桃の弓を用い葦の矢で鬼を射る儀式であったが，近世民間では，節分の行事となっている。

## 医学・薬学との係わり

ヨシは，上述のごとく，“疫病を払い無病息災を祈る神事や呪術”という意味で，古来，“医学”に係わってきたといえるが，ここでは，薬材としてのヨシをとりあげる。ヨシの花，茎，根茎（特に重要），嫩苗，托葉，葉，ならびにセイタカヨシ（セイコノヨシ：*Phragmites karka*（Retz.）Trin.）の根茎が生薬原料として利用できることは，古くから中国や日本の各種本草書に記載されているが，本稿では，それら諸本の代表として，長い歴史をもつ中国生薬の集大成ともいうべき「中薬大辞典」（上海科学技術出版社・小学館，1985）を選び，同書より，“正式生薬名”，“薬効と主治”の項を抜粋・引用して表1示すにとどめる。

＜付記＞

①基原植物がヨシではないのに，蘆の字がつく薬材。＜ウリ科＞苦壺盧（蘆）（クコロ；和名，ヒョウタン），葫盧(蘆)（コロ；和名，フクベ），実葫蘆（ジツコロ）；＜ツバキ科＞皐蘆（コウロ；異名，瓜蘆（カロ））；＜キク科＞漏蘆　（ロウロ），葫蘆七（コロシチ），水葫蘆七（スイコロシチ）；＜マメ科＞葫蘆茶（コロチャ），胡蘆巴（コロハ：異名；葫蘆巴（コロハ），蘆巴（ロハ））；＜キンポウゲ科＞水葫蘆苗（スイコロビョウ）；＜ウコギ科＞人参蘆（ニンジンロ；和名，オタネニンジン）；＜ユリ科＞　藜蘆（リロ；異名，豊蘆（ホウロ）），葱白藜蘆（ソウハクリロ），蘆蓮（ロレン），蘆薈（ロカイ；和名，ケープアロエほか）；＜キツネノマゴ科＞蘆莉草（ロリソウ）；＜コショウ科＞蘆子藤（異名，蘆子蘭　（ロシラン））；＜イネ科＞蘆竹（ロチク；荻蘆竹（テキロチク）とも；和名，ダンチク）；＜モクレン科＞蘆山厚朴（ロザンコ

**表1** 「中薬大辞典」収載のヨシ属生薬.

| 薬用部位 | 生薬名 | 薬効と主治 |
|---|---|---|
| ヨシ（アシ） | | |
| 花 | 蘆花<br>ロカ<br>lu hua | 止血し解毒する効能がある.<br>鼻出血，血崩（子宮出血），上吐下瀉（上は吐き下は下痢する）を治す. |
| 茎<br>（若い茎） | 蘆茎<br>ロケイ<br>lu jing | 肺癰による煩熱を治す（「本草綱目」）.<br>[処方例] 葦茎湯：咳が出て微熱がある，煩満，胸心甲錯などの症状をもつ肺癰の治療（「千金方」）. |
| 根茎 | 蘆根<br>ロコン<br>lu gen | 清熱する，津液を生じる，煩を除く，嘔を止める，の効能がある．熱病による煩渇，胃熱による嘔吐，噎膈，反胃，肺痿，肺癰を治す．またフグの毒を解く.<br>[処方例] 五汁飲：太陰温病により口渇ががひどく，粘性の強い白いつばきを吐き不快感のあるものの治療（「温病条弁」）. |
| 嫩苗<br>（若い芽） | 蘆筍<br>ロジュン<br>lu sun | 熱病による口渇，淋病，小便不利を治す. |
| 托葉 | 蘆竹托<br>ロチクタク<br>lu zhu tuo | 金瘡（刀槍傷之瘡）を主る，肉を生じる，傷跡を滅する，の効能がある（「薬対」）. |
| 葉 | 蘆葉<br>ロヨウ<br>lu ye | 上吐下瀉（嘔吐，下痢），吐血，鼻出血，肺癰，発背（背中にできる腫れもの）を治す. |
| セイタカヨシ（セイコノヨシ） | | |
| 根茎 | 水蘆荻根<br>スイロテキコン<br>shui li di gen | 清熱する，利尿する．大熱症による発狂，熱瀉を治す（「南寧市薬物志」）. |

ウボク）。

②［蘆頭（ろず）］：薬用植物の根や茎で，薬材にならない部分。

③［芦木（ろぼく）lumu］：熱帯産の常緑植物，葉の汁は色は黒く光があり薬用とする（「中日大辞典」（愛知大学中日大辞典編纂処，1987）。＜参考＞［蘆木（ろぼく）］：古生代石炭紀に繁茂したトクサ類の化石シダ植物で，その遺骸が現在の石炭）。

④［reedy nail（＝nail splitting）］：葦状爪，爪甲縦裂（症），つめ縦裂症。

⑤［リード手術（Reed's operation）］：アメリカ婦人科医C.A.L.リードが開発した卵管卵巣静脈瘤の手術法。

⑥［ドロシー　リード細胞（Dorothy Reed cells＝Reed-Sternberg cells）：アメリカ病理学者D.リードによって研究されたホジキン（Hodgkin）病の病巣に特徴的な多核性巨大細胞。

### 有機成分

ヨシの無機成分については，製紙原料や飼料としての評価に関連してかなりの研究が行われ，各種ミネラル（特にSi）に富むことが明らかにされているが，本稿では，それらの分析結果は省略し，これまでに検出・同定されたヨシの有機成分のみを以下に列挙する。現時点では，ヨシだけに特有な成分は，発見されておらず，また既報成分と生

薬としての薬効との関連も解明されていない。

**1) 糖質**

a) 低分子糖質。単糖；ribose, xylose, (arabinose?), fructose, galactose, glucose, mannose。二糖；sucrose, melibiose。三糖；raffinose。サイクリトール；myo-inositol。ほかに配糖体成分の糖部として，単糖の D-glucose と L-rhamnose および二糖の gentiobiose と rutinose。

b) 高分子糖質。デンプン (amylose+amylopectin), cellulose, β-(1→3):(1→4)-D-glucan（イネ科植物に特有），xylan（ヘミセルロース），cellulose, polyuronide（構造未詳），arabinoxyloglucan（免疫活性），糖タンパク（花粉アレルゲン）。

**2) 脂質**

飽和脂肪酸；formic, acetic, caproic, lauric, palmitic, stearic acids。不飽和脂肪酸；oleic, linoleic, linolenic acids。ほかに，2種の未同定脂肪酸が存在。

**3) アミノ酸，ペプチド，タンパク質**

遊離状ならびにタンパク質構成アミノ酸の組成分析に関する若干の研究があり，ヨシは，ほとんどすべてのアミノ酸を含み，牧草ないしサイレージ用として，高い飼料的価値を有することが指摘されている。その他のアミノ酸；γ-aminobutyric acid, glycinebetaine (lycin), nicotinanamine。ジペプチド；alanylalanine（立体配置未詳）。

**4) ビタミン類**

各種のビタミン類に富むが，特にビタミン C (L-ascorbic acid) の含有量が高く，かって旧ソ連ではヨシを原料としたこれの工業的製造が行われていたほどである。ヨシは，ほとんどすべての水溶性ビタミン類を含有しており，未検出なのは，ビタミン $B_6$ のうち pyridoxal, pyridoxamine，ビタミン $B_{12}$ のうち hydroxycobalamine，ナイアシンのうち nicotinamide，それに folic acid と lipoic acid のみ。脂溶性ビタミン類；プロビタミン A の carotene，ビタミン E のうち tocopherol，およびビタミン F のうち linoleic acid と linolenic acid が存在。

**5) トリテルペン，ステロール**

トリテルペン成分；β-amyrin，taraxerol，taraxerone。ステロール成分；campesterol，β-sitosterol, stigmasterol, cholesterol。また，ツルヨシ (*Phragmites japonica* Steud.) には，β-amyrin, campesterol, β-sitosterol, stigmasterol が存在。

**6) 芳香族アルデヒド，芳香族カルボン酸**

芳香族アルデヒド；p-hydroxybenzaldehyde, syring-aldehyde, vanillin。芳香族カルボン酸；p-aminobenzoic, vanillic, ferulic, p-coumaric, caffeic, gentisic acids。これらの芳香族カルボン酸には，数種のバクテリオファージに対する阻止活性が認められている。lignin の研究も多い。

**7) フラボノイド**

フラボン成分；tricin（葉，茎）およびその 7-*O*-β-D-glucoside（葉），swertiajaponin（花，葉）およびその 3'-*O*-β-D-glucoside（花）と 3'-*O*-β-gentiobioside（花），isoswertiajaponin（花），swertisin（葉），orientin（葉），isoorientin（葉）およびその 3', 7-di-*O*-methyl ether（葉），isoscoparin（葉）。フラボノール誘導体；rhamnetin の 3-*O*-β-D-glucoside（花）と 3-*O*-β-rutinoside（花），isorhamnetin の 3-*O*-β-D-glucoside（葉）と 3-*O*-β-rutinoside（葉），quercetin の 3-*O*-β-

D-glucoside（葉）と 3-*O*-$\beta$-rutinoside［＝ rutin：毛細血管強化，血管の補強作用を有する］（葉）。

**8）クマリン誘導体**

地上部に，esculetol［＝ esculetin］と esculoside［＝ esculin］を含む。

**9）アルカロイド類**

インドール系アルカロイド；gramine，N，N-dimethyltryptamine，bufotenine，5-methoxy-N-methyltryptamine，serotonine のトリプタミン類，および indole-3-acetic，-propionic，-butyric acids のオーキシン類。その他のアルカロイド；蘆根から天然には稀な coixol が報告されている。ヨシ，ツルヨシ，セイコノヨシ（セイタカヨシ）の穂には，時に，バッカク菌（*Claviceps purpurea*）が寄生し，菌核（麦角）を形成するが，この中には，バッカクアルカロイド類（子宮収縮作用などを示す）が含まれている。なお，幻覚誘発薬の LSD は，バッカクアルカロイドの加水分解産物として得られる lysergic acid のジエチルアミド誘導体である。

## 食文化との係わり

ヨシが食べられることは，古くから知られており，例えば，享和 3 年（1803）刊の「本草綱目啓蒙」の蘆の項には，“春，旧根ヨリ苗ヲ生ズ。初メ出ル時筍ノ如シ。唐山ノ人ハトリ食フ。コレヲ蘆筍ト云。然レドモ南土ノ者ハ堅シテ食フベカラズ。北土ノ者ハ柔らニシテ食フベシ。今清商食用ニ持来ル者，長サ三寸許，二ツニ剖テ蒸乾シタルモノ也。是ヲ水ニ浸シ，煮食フ。”とある。

ヨシが備荒（救荒）植物であることを記した文献としては，天保 4 年（1833）の「備荒草本図」や同 14 年（1843）の「救荒本草啓蒙」，明治 18 年（1885）文部省刊の「救荒植物集説（日本農学会抄録）」，昭和 18 年（1943）陸軍獣医学校刊の「食べられる野草」などがある。

食材としてのヨシに触れた比較的最近の若干の文献につき，記載内容を以下に紹介する：①若芽と根を食用となすを得。アイヌは地下の若芽を掘り出して常食し，上海にては蘆筍と称し名物なり（服部・近藤，1935）；②ヨシの類の筍は少しく苦味があるが，「たけのこ」同様の調理法によって食用とする（柴田，1957）；③春に，タケノコのような若芽を採り，皮をむいた後，ゆでて水にさらす。うすく切り，煮つけ，あえもの，酢のもの，汁の実などに。炊込みご飯にしてもおいしい（那須，1987）；④ヨシの若い芽を乾燥させ，粉砕して粉とし，それだけではなさそうだがパンケーキのようにするというのをカナダの北の方で聞いた。カナダインディアンのレシピであるらしいが，それが食えるのならヨシ原は一大食料生産の場だ（辻井，1987）；⑤近年台湾で蘆筍といって缶詰にして輸出するものはアスパラガスである（堀田・緒方，1989）；⑥地下茎を生で，あるいは日干しにして生で食する。味は甘い（田中・小川ほか，1991）；⑦琵琶湖の浄化を考える企業グループ「琵琶湖エコフォーラム」が，ヨシの芽の試食会を開く。掘り起こしたヨシの芽はタケノコ状，県内でも昔は日常的に食べていたという説が残っている。試食会では，県が毎年一定量を浚渫したヘドロの埋め立て地（守山市木浜町）で育ったヨシの芽を採り，煮炊きする（「朝日新聞」，1995 年 9 月 3 日）。

ヨシは，食材になるほか，次の諸点においても“食文化”と係わりあってきた。

a）［食材の生産・捕獲・加工への寄与］　①ヨシは，太古の時代から水田好適地の指標植物として役立ったばかりでなく，現在でも暗渠用ヨシが稲作に貢献している。②ヨシは，各種漁具の素材と

して利用されてきた（“用途の概況”の項参照）。③葭簀は，寒天・茶・海苔・椎茸などの生産・加工の過程で今も用いられている。

b）［食品の包装材］　①ヨシの葉は，古くから蘆粽（あしちまき）に用いられており，「和漢三才図会」（正徳２年（1712））に，“蘆の葉は大きく馬篠（ささ）に似て，茎・葉いずれも蒼あおとして，粽をつつむものとして，摂州の難波の産が有名である。”と記されている（“神事との係わり”の項参照）。②小さな葭簀は，土産用食品などの包装に，またレストランなどでテーブルマットとして，利用されている。

c）［食器具類の素材］　①江戸時代には，長さ２，３寸の葭子（ヨシの若芽）を甘露糖につきさして吸う風習があり，“薮入の土産に葭子そへて出し”（「柳樽」）と川柳にもよまれている。②「中日大辞典」（愛知大学中日大辞典編纂処，1987）の［芦酒 lujiu］の項には，“酒をあしの管で吸い飲みする，また味の薄い酒”という説明がある。③1998年８月31日の「読売新聞」記事：天然のアシだけで作った皿とボウルの食器が，クック食品（本社・大阪市）と上海其安実業有限公司（中国・上海市）で共同開発され，環境にやさしい商品として注目される。

d）［ヨシまたはアシに因んだ呼び名をもつ食材の例］　①植物性食材；蘆ふく（大根　なずなの根），葫（胡）蘆（フクベ，瓢箪；宋の太祖のことば“様に依りて葫蘆を描くのみ”は，型どうりに瓢箪を描くだけの意で，独創性に乏しい安易なやり方の譬え），蘆さい（黍の異名），蘆粟（ろぞく；サトウモロコシの漢名，砂糖・酒・酢などの製造原料）。②動物性食材。葦葉鰈（目板鰈，木の葉鰈），葦切鮫，葦登，葦魚（エツ　*Coilia nasus*；外形が葦の葉に似ているので，朝鮮半島では“葦魚”，中国では“刀魚”と書く。エツにまつわる伝説；筑後川を渡れずに難渋していた弘法大師が，漁師に助けられたお礼に岸辺のヨシをとって川に投じたらそれがエツに変身した）。ヨシエビ（葦蝦）（シラサエビ＝スエビの別名）。葦鶴（あしたづ；「本朝食鑑」に，“鷹を放って鶴を捕え，毎歳の始め禁裡において鶴の庖刀ということが行われるが，これは庖人の秘伝であって妄りにその儀は伝えない”由の記述がある（中国や朝鮮では，鶴は食用にしていなかった）。

e）［ヨシまたはアシに因んだ呼び名をもつ特産食品の例］　①芦原温泉の＜芦のゆ玉＞；黒小豆餡入り和菓子，名前の由来は，“月の夜，芦の間から湧き出る温泉の湯気が玉の如く望見され，里人がこれをゆ玉と云い慣わすようになった”ことによる。②和歌山名物の＜蘆辺煎餅＞；山部赤人の万葉歌“和歌の浦に潮満ちくれば潟をなみ…”に因んだ絵を焼きつけた卵入りの煎餅。③滋賀県守山市の＜歯がたの葦せんべい＞；名前は，“蓮如上人が西江州から赤野井湾へお入りの途次，群生する葦をお口にされたところ，上人のお徳を慕って，今も辺りの葦には「蓮如上人歯型の葦」が一帯に見られる”という故事に基づく。④和歌山地方の＜あしべ焼き＞；近海産のグチ，ハモ，トビウオなどを原料に用いた高級焼蒲鉾。⑤京都美山の＜芦生漬＞；漬物。⑥静岡市足久保産の＜蘆（足）久保茶＞；今の本山茶で，幕府への献上品として有名だった。

## 住いとの係わり

### 1）葦の家（reed house）

イラクの一大湿地帯・マーシュランドには，柱・壁・天井がすべて葦でつくられたマディフというシュメールの時代から伝わるカマボコ形の“葦の家”があり，アラブ系のアマダン族の人々が今日も実際にそれに住み，伝統的な暮らしを守っている（この地方には，家畜のための葦の家や葦の絨

毯もある)。マディフ(図や写真が掲載されている参考書:川島,1990;吉川・NHK取材班,1990など)とまったく同じ葦の家は,大英博物館所蔵の5000年前のレリーフにも残されている。また1988年の奈良シルクロード博の敷地には,琵琶湖水郷産のヨシで造った実物大(間口×奥行×高さ=5×15×5m)のマディフが建造されていた。ほかにペルーのチチカカ湖でも,インカ帝国末裔のインディオ(ウル族)が今もトトラ葦(totora:*Scirpus totora*(カヤツリグサ科))で浮島・家・舟を造って生活しており,ベネズェラアのマラカイポ湖にもグアヒラ族の葦の家がある。

わが国でも,アイヌ民族博物館(北海道白老町)に,ほとんどヨシだけで作られた家が数棟設置されている。また,実用の家ではないが,平成2年度から恒例になった大津市主催のイベント"湖辺ルネッサンス－大津のヨシ作戦－"(1997年度)の会場には,琵琶湖のヨシで造った"ヨシかまくら"と称するオブジェが展示されていた。

**2) 茅葺き屋根**

茅とは,屋根葺きに用いる草本(ヨシ・チガヤ・スゲ・ススキなど)の総称であり,葦の屋(あしのや)[=葦の丸屋(あしのまろや),葦篠屋(あしのしのや)]は,葦で屋根を葺いた粗末な小屋をさす。

茅葺き屋根の参考書(安藤,1983;ブランスキル,1985;川島,1973,1987,1990,1992;小林,1984;日塔,1983;杉本,1974;内山,1987;吉田,1981,など)は多いが,ここでは以下に,「屋根のはなし」(石田,1990)から,"茅葺き屋根と人の暮らし"に特に関係が深い記述を抜粋・引用する:茅葺きは原始時代から最も広く用いられてきた屋根構法であり,日本の原風景の重要な形成要素である(筆者注.今回の国際ワークショップ直後の1999年7月22日付け「読売新聞」記事;富山県小矢部市の桜町遺跡で,縄文時代晩期(約2500年前)の高床建物の実物の屋根材が初めて出土。敷き詰めた樹皮に葦(ヨシ)を重ねた草ぶきで,屋根材の出土としては国内最古)。なぜ茅葺き民家は消えるのか?この問題について,柳田国男はおおよそ次のように考察している。茅葺き屋根を保つには,材料である茅を育てておく「茅場」が村内に必要である。しかし,換金作物をつくる田畑を拡張したいという圧力は,常に茅場を脅かしてきた。そこへもってきて,明治維新後,瓦が一般庶民の手にも入りやすくなる。茅葺きをやめ,瓦に葺き変える家が村のなかにでてくる。そうなるといかなる事態が生じるか?村中の家が定期的に茅を葺き替えることができるのは,そのための相互扶助システム=「ユイ」(結)が存在しているからであった。共有の茅場を育てることからはじまり,茅の刈り取り,小屋組の構築,屋根の葺き上げまでのプロセスを,村民全員が協力して行うシステムである。この取り決めはきわめて厳格なものであって,援助として受けた労働と同じだけの労働量を返さねばならない。金銭や品物で済ませられるという性格のものではないのである。こうした堅固な労働交換システムが成立していればこそ,茅の安定供給が約束されるし,また,合掌造りの大屋根の葺き替えを一日ですますことも可能となる。柳田国男の丁寧な説明を見てみよう。「ここに三町歩とか四町歩とか,ちょうど普通の家の屋根が二戸葺けるだけの,茅の生える共有地が有るとする。--よく葺いた萱屋根は,おおよそ三十年ぐらいはもつとすれば,順番をこしらえて或家は幾分か早めに,又或家はなんとかして少し長く辛抱すると,五十軒以上の農家が,たった是だけの萱野によって,次々に屋根を葺いて行くことが出来るのみか,仲間が助け合って五十束七十束と苅り集めてくれて,苅り時をおくらす心配も無いのである。」いかにも結構なシステ

ムであるが，しかし，自宅を瓦に葺き変えて，自分が「ユイ」は単なる勤労奉仕の強要にすぎなくなる。誰もそんなシステム内にはとどまらない。「ユイ」が崩壊すると，まず，茅が手にいれにくくなる。三十年に一度の葺き替えのために，二十九年間，むなしく茅野を育てていくのは個人ではまず不可能だ。茅葺き職人も賃雇いで手配しなければならない。かくして「一人の物好きが静かな雨の音を聴こうとすると，殆ど有る限りの無理をして，草と職人とを遠方から喚ばねばならぬ。」茅葺きがすたれる理由は，「ユイ」の解体だけではない。柳田国男の時代にはなかった事態もおきている。すなわち，建築基準法22条の規程「特定行政庁が防火地域及び準防火地域以外の市街地について指定する区域内においては，耐火建築物及び簡易耐火建築物以外の建築物の屋根は，不燃材料でつくり，又はふかねばならない。(以下略)」によって，茅のような燃えやすい材料で屋根を葺くことは禁じられているのだ。そして，ここでいう「指定する区域」というのがきわめて広いのだ。人家のあるようなところは全部カバーしているといってよい。建築基準法の適用を除外される建物は，国の重要文化財に指定されないとダメなので，都道府県あるいは市町村レベルの文化財に指定されただけでは，この22条からまぬがれることはできない。このためにかなり名のある民家でも，不細工なトタンから縁が切れないというケースがいくらも出てくる。

消え行く茅葺きを憂慮する有識者も多く，例えば，財団法人文化財建造物保存技術協会の日塔和彦氏は，1996年11月30日の「読売新聞」紙上で，“茅葺き技術の保存を　職人の高齢化や後継者不足　「形だけ」でない対策急務”と題する寄稿文の中で警鐘をならしておられる。

一口に茅葺き民家といっても，それが存在する土地の気候風土に応じて，それぞれ特徴を有している。民家園に移築され，もとの環境とは無縁になった茅葺き民家しかみられなくなる日が遠からずやってくるかもしれない。しかし，今のところ，世界文化遺産の“白川郷，五箇山の合掌造り集落”をはじめ，日本には，実際の生活が営まれている茅葺き集落はまだかなり残っている。一度は泊まってみたい茅葺きの宿として，西田・サライ編集部(1996)は，次の20軒を推奨している：かやぶき屋(山形県田麦俣)，桜林坊(山形県手向)，扇屋(福島県湯野上温泉)，伊勢屋(福島県大内宿)，山楽(福島県湯ノ花温泉)，巴屋旅館(茨城県横川温泉)，すぎの子(埼玉県荒川村)，御嶽山荘(東京都桧原村)，鱒の家(山梨県忍野村)，極意(長野県戸隠村)，野尻湖ホテル(長野県信濃町)，十右エ門(岐阜県白川郷)，孫右エ門(岐阜県白川郷)，庄七(富山県五箇山)，白谷荘(滋賀県マキノ白谷温泉)，ダン林(京都府久多)，とがの木茶屋(和歌山県中辺路町)，阿波山清(岡山県阿波村)，えのはの家(宮崎県五ヶ瀬町)，阿久根(福岡県柳川市)。

一方では，近年，茅葺き屋根の保存にも技術的な進歩がみられ，ハンガリーでは，ヨシの不燃化に関する特許(「CA」115-946823)が成立し，日本では，松本建設(栃木県真岡市)によって，茅葺き屋根を丸ごと燻蒸して防菌防虫，さらには“コーティング”効果をもあげる装置「スーパーケムラー」が開発されている(1996年12月10日の「読売新聞」)。

滅びゆく“茅葺き民家のある風景”を描き続けた洋画家・向井潤吉の画集を見るとき，日本人ならだれしも深い郷愁に誘われるであろうが，茅葺き屋根は何もわが国独自のものではなく，広く世界各国に分布している。ここではヨーロッパについてのみ少しふれておく。最近の調査によると，イングランドには，草葺きの建物が約5万戸ほどあり(特に多いのは，サマセット州のセルワージー

(Selworthy) 地方), 材料には, ヨシ (ノフォーク特産のものが最上), スゲ (菅), 藁, ヒース属植物, 芝などがが用いられている (ブランスキル, 1985)。ウォリックシャー州, ショッタリーのストラトフォード オン エイボン (Stratford upon Avon) にあるシェィクスピアの妻の生家 "Anne Hathaway's Cottage" は, 16 世紀の菅棟として有名である。因みに, "鉄の女" といわれたマーガレット・サッチャー元英国首相の姓の綴りは, "茅葺き職人" をあらわす thatcher と同じである (日本の苗字で, "葺" の字を含む例は少ない : 葺屋, 葺原, 葺山, 葺沢, 葺谷, 葺名, 葺毛)。ルーマニア, ハンガリー (ドナウ河下流地方), オーストリア (ブルゲンランド地方) にも葭葺き民家が多く, また数は少ないがフランスのノルマンディ地方 (セーヌ川北方) にも茅葺き民家が残っている (川島, 1987)。

### 3) 垣根

そもそも, ヨシ属のラテン名 *Phragmites* は, ギリシャ語の phragma (垣根・堺の意) に由来し, 語源は, ヨシが溝に沿って生垣状に生育することに因んでいる (参考. *australis*, 南方の ; *communis*, 普通の)。ヨシを編んで作った垣は, 外国にもあり, 英語では reed fence, 中国語では芦藩 (lufan) と呼ばれる。

わが国の [葦垣 (あしがき ; 上代は清音, あしかき) : 葭垣 (よしがき)・葭簀垣 (よしずがき)] とは, 葦を結いあわせて作った粗末な低くて軽い垣である。普通, 杉丸太を建て, これに竹の胴縁を取付けたものを下地とし, 葭簀を張った上で押縁竹を縄で結び付けて固定する。秋里籬島の「石組園生八重垣伝」(文政 10 年 (1827)) には, 総計 34 種類の垣が紹介されているが, そのうち材料に葭を用いるものとしては, 襖垣, 雲上袖垣, 几帳垣, 覗垣 (茶庭用), 小待垣, 火灯垣 (中庭門用) の名があげられている (額田, 1984)。

「万葉集」,「源氏物語」など日本古典には, "葦垣" の用例がしばしばみられる。"葦垣の" は, 枕詞であって, "古る", "乱る", "間近し", "外 (ほか)", "吉野" (地名) にかかる。江戸時代には, 年を越すことを "よし垣を越える" といっていた (大久保・木下, 1991)。また, 苗字に芦垣, 蘆垣が, 地名に芦垣があるほか,「葦垣」という催馬楽の曲名や「芦垣」の銘をもつ茶道具 (中興名物。瀬戸破風窯渋紙手茶入。渋紙色の胴部に, 金気釉が一帯に連らなって景色をなしているのを芦垣に見立てた) もある。

### 4) 家具

"ヨシと家具との係わり" といえば, 真先にあげるべきは, 需要が漸減しているとはいえ, ヨシの本来の用途である葭簾や葭戸であるが, それらについては, たいていの方がある程度ご存知かと思われるので, ここでは, 一般にはなじみが薄い葭棚 (よしだな ; yoshi shelf) をとりあげる。葭棚は, 茶道で利久好みの台目棚とも呼ばれ, 杉木地で作り, 台目柱は皮付きの赤松小丸太を用い, 2 分厚の葭簀を張りめぐらし, 煤竹で押え, 隅の部分は棚板を白竹で吊った棚物の一種であって, 広間などで台目据えとして使用される (炉, 風炉兼用)。なお, 蘆葉棚 (ろようだな, あしばだな ; 雁木棚とも) というのは, 床脇に設けられる違い棚の一種で, 普通の違い棚が 2 段であるのと異なり, これは 3 段に連なって雁行する。

## 葦 舟

古代エジプトでは, パピルス葦 (カヤツリグサ科) を束ねた葦舟がナイル川の水上交通具として使用されていた。サッカラのラムセス二世の妹の墓には, 黄泉の国へ向かう葦舟が浮彫りされてい

る。聖書にも，“これは走ること葦舟のごとく”（「ヨブ記」9：26）の語句が見え，また幼児モーゼがパピルスで編んだ籠に入れられ，ナイル川のパピルスの茂みに捨てられた（「出エジプト記」2：3）ことが記されている。今日でも，アフリカのナイル川上流のシルク族やベングエラの海岸住民，またニュージーランドの原住民が，葦舟を使用しているし，南米ペルーのチチカカ湖では，インカ帝国（1438〜1534）末裔のインディオがトトラ葦舟を用いている（ペルーの沿岸でインカ帝国以前に文化国家を形成していたモチェの彩色土器にも，アシ舟を漕ぐ漁師が型取られている）。

葦船による実験航海で有名なのは，ノルウェーの文化人類学者，トール・ヘイエルダール（Thor Heyerdahl）である。彼は，先ず1947年，インカ時代そのままの製法でバルサ材製の筏・コンチキ号（Kon Tiki：ペルー語で太陽神の意）を作り，ペルーから南太平洋のツアモツ諸島まで漂流し，ポリネシア文化の起源が南米であった可能性を立証したのに続き，古代エジプト時代にエジプトとアメリカ大陸との間で文化伝播があったとする自説を裏付けるため，往時のパピルス船を再現したラー（Ra：古代エジプトの太陽神）一世号（1969年）と二世号（1970年）による大西洋横断に挑戦した。一世号の航海は，アメリカ海域に入りながらも失敗に終ったが，二世号はモロッコ〜バルバドス島間の自力帆走（57日間，6000キロ）に成功した（ヘイエルダール，1971；小原，1973）。このあと，1977年，ヘイエルダールは，葦舟チグリス号（Tigris）を建造し，日本人一名（鈴木公）を含む総勢11人のクルーで11月23日にクルナを出帆し，ペルシャ湾→ホルムズ海峡→アラビア海を経て，翌1978年3月29日に小国ジブチの港に入ったが，不穏な政情のため，紅海（葦の海）の入口“嘆きの門”の前で，まだ充分しっかりしていた船体を火葬に付さざるを得なかった（鈴木，1980）。さらに最近，1997年，“ヘイエルダールの支援を受け，イースター島で建造されたスペイン海洋探検隊（隊長：キティン・ムニョス・バルカルセル）の葦の大型帆船マタランギ（天国の瞳）号（全長30 m，70トン，3本マスト）が，南太平洋の“海の道”を使った古代人の交易ルートを実証しようと，5月4日にイースター島を出航し，タヒチ島からシドニーに向かっており，この後ダーウィンから海流に乗って北上，来年初夏にも東京湾を目指す”と報道（5月21日の「読売新聞」）されたが，その後間もなく，“同船は，嵐に巻き込まれて遭難し，隊長は再挑戦を決意，今秋完工をめどに新しい葦船の建造を開始した”との続報（6月18日）が入った。

架空の葦舟としては，英国生れの児童文学者で画家のBB（＝D.J.Watkins-Pitchford）の「あなぐまビルのぼうけん」シリーズの中に，“あしのささやき号（Whispering Reeds）”が登場する（BB，1984）。また，葦舟に関係がある伝説としては，“蘆葉達磨（ろようだるま）”がよく知られる［関連語句：葦葉（あしのは）達磨，渡海（とかい）達磨，一葉渡江（いちようとこう），一葦（いちい）］。蘆葉達磨は，水墨画や浮世絵の画題の一つで，その図は，頭巾をかぶり朱衣をまとう達磨が蘆の一葉に乗り，インド（天竺）から中国へ（あるいは中国から日本へ）伝法のため海を渡る様を表わす（一説に，武帝のもとを辞し，洛陽を目指し揚子江を渡る図とも）。多くの画家に好まれた画題であるが，宮本武蔵も「蘆葉達磨図」の作品を残している。この場合，蘆葉は，中国南方の葦の葉のように細い丸木舟，もしくは葦で編んだ古代の粗末な小舟をさす語かもしれない。あるいはまた，達磨大師が実は軽気功法の使い手で，水面を歩くことができたのであろう，ともいわれる。小説家・樋口一葉は，この故事に因み，“達磨には足がない→自分は貧乏でおあし（＝金）が

ない”ところから，号を“一葉”としたのだという。

序でに蘆葉達磨に関連した諺をここであげておく：①“葦の葉に法（のり）の方便”；（“法”と“乗り”をいいかけて）つまらない物でも使い方によっては役立つことのたとえ。②“葦を銜（ふく）む雁”；雁が遠く海を渡る時，海上で翼を休めるため，アシの葉を口にくわえていくという「淮南子　修務訓」に出ている故事に基づく（これを主題とした落語に初代・柳亭燕好が演じた「雁風呂」がある）。③“雁は蘆を銜みて網を捍（ふせ）ぎ，牛は陣を結びて以て虎を卻（しりぞ）く”；鳥獣は自己防衛のために自然の知恵を備えているの意。

わが国においても，葦舟の歴史は古い。福井県井向出土の銅鐸に弥生時代の葦舟図象（木造船説もある）が見られるほか，福岡県竹原古墳の後室壁画には，赤と黒の三角旗を掲げた葦舟に波の紋様があり，この葦舟形式は，エジプトのパピルス船に発源する太陽船信仰によるものと解釈され，その頃既に南方系文物との交流があったことを推察させるのである。「古事記」には，三歳になっても脚が立たなかった蛭子（ひるこ）（伊邪那美命の子，のちの恵比須）を葦舟で流し捨てた，と記されている。葦舟文様の芸術作品も多いが，なかでも伝本阿弥光悦作の「芦舟蒔絵硯箱」（東京国立博物館蔵）が有名である。

日本古典に出てくる“葦舟関連語句”の若干例をあげる：［葦舟（あしぶね）］①葦で作った舟，②葦を積んだ船。③水に浮かぶ葦の葉を舟にたとえる語。［葦小舟（あし（の）おぶね）＝葦刈小舟（あしかりおぶね）］①刈った葦を積む小舟，②葦刈りの用とする小舟；［あしのほ舟（あしのほぶね）］（葦の「穂」に「帆」を言いかけて）帆船。［葦分（別）（あしわけ）］①繁った葦の中を押し分けて進むこと。②差し障りあることのたとえ。③“葦分け”は，茶庭に好んで用いられる玉石敷の一種；（②から）玉石または玉石と切石などを混ぜ，目地が十字を切らないように，また石が同じ調子に並ばないように按配して敷きつめた路で，霰零し（あられこぼし）とも称される。［葦（蘆）分（別）舟（あしわけぶね）＝葦（蘆）分（別）小舟（あしわけおぶね）］①生い茂った葦の間を漕ぎ分けて行く小舟。②（その状態では進みにくいところから）物事に差し支えの多いことの比喩。③“さわり多み”にかかる序詞。［排蘆小船（あしわけおぶね）］本居宣長著の歌論書，宝暦9年（1759）ころ成立。書名は，「万葉集」の“湊入の葦別小舟障り夛みわが思ふ君に逢はぬ頃かも”に由来。［茅船，萱船（かやぶね）］茅を積んだ船。船軍（ふないくさ）の時，これに火をつけて敵船の間に放った。

次に，最近の新聞報道から，“琵琶湖の葦舟”に関する話題を拾って示す。①1980年8月5日の「毎日新聞」；ヨシ舟出航；琵琶湖で近大探検部の4人，実験--夢は外洋へ：これら若者の奇抜な発想に意気を感じた西川嘉右衛門さん（注．筆者の父）が5000本のヨシをプレゼント。4人は西川さん宅の敷地の一角にテントを張って“造船”にかかり，全長4.2m，幅1.1mの二人乗りのヨシ舟を完成。5日午前10時，オールでこぎ出すと，ヨシ舟は滑るように走り出し，蓬莱浜をあとに10日間の実験航行が始まった。②1990年8月2日付け「京都新聞」；大阪で開かれている花の万博に「水の大切さ，水がはぐくむ自然」のメッセージを伝える大津市・市花博出展推進委の「びわ湖から花博へ　大津よし舟隊」（中学生ら総勢27人，予備舟を含め5隻）が，8日膳所公園を出発，2日間をかけて瀬田川から淀川を下り花博会場に着く。ヨシ舟（幅90cm，長さ4～5m）は，昨年の大津夏まつりでヨシ舟を湖上に浮かべた実績がある大津JC（青年会議所）の協力を得て製作した。③1992年3月28日の「京都新聞」；西の湖でのヨシ焼きを中心にした総合イベント「近江八幡よ

し焼き祭り」において，オランダ出身の彫刻家ヴァントホフ　ヤンさんが竹とヨシを組み合わせて作ったヨシ舟（幅約80cm，長さ9m）を進水させる。琵琶湖以外の葦舟記事（1991年8月1日の「北国新聞」）；石川県志賀町神代神社に，伝わる秘事「大祓葦舟流し」が30日，通称神代川（米町川）で行われた。同神事は氏子にも非公開で，神官一人によって執り行われてきたが，水野宮司は「公開することで，地区の祭りとして町おこしに役立たせたい」と夢を膨らませている。この神事は，宮中などの古いしきたりなどを記した「朝野郡載」によると，康和5年（1103年），京都の宮中で行われた占いで，「神代神社の社司が神事をけがした」との卦が出たため，宮中が使者をつかわして祓いをさせたことによる。戦後中断していたが，昭和58年に復活した。水野宮司は，夕方の引き潮時に合わせ，大祓いの身代わり人形約六千枚などを乗せた長さ約90センチの葦舟を，川の中に設けた祭壇に祭り，川面に浮かべて海まで流した。

### 葦笛，リード楽器

ヨシの楽器で最も単純なのは，いわゆる“草笛”であり，これに関連した語句には，[葦の葉笛＝葦笛＝蘆笛＝蘆角；葦の葉を巻いて作った草笛]とか，[蘆笳（ろか）＝蘆管（ろかん）＝蘆笛（ろてき）；北方の外人（胡人）の笛，あしの葉で管を作り，管に穴をあけたもの]などがあり，引例としては，「奥の細道」の“忘れぬ花のむかしをしたひ，蘆角一声の心をやわらげ”や謡曲「猩々」の“江の内の酒盛り，猩々舞を舞はうよ。芦の葉の笛を吹き，波の鼓をどうど打ち（芦の葉ずれを笛に，波の音を鼓に見なしたもの）”などがよくあげらる。

“ヨシの草笛作り”については，佐藤・佐藤（1993）が，“アシはさまざまな草笛遊びが楽しめるだけではなく，アシ舟をはじめ，いろいろなものがつくれて，遊びの王様といえるかもしれません”と記したあと，①葉を用いる“アブ笛”（アブが飛んでいるような音を出す），“まわりアシ笛”，“葉巻き笛”（昔から伝わる有名な草笛），②葉鞘を用いる“葉サヤの笛”，③茎もしくは根茎を用いる“パンパイプ”の工作法をわかりやすく説明している。また，前出「湖辺ルネッサンス」では，協力者のドロップアンドスターデザイナーズネットワークが，「ヨシ笛（パンパイプ）を作ろう！」というパンフレットを作成し，会場で配布した。

ここに出てきたパンパイプ（Pan pipe；パンの笛とも）は，長さの異なる閉管を筏型または円環状に並べて息を吹き込んで鳴らすフルート属の気鳴楽器で，その名は牧神パン（Pan）と妖精シュリンクス（Syrinx）にまつわるギリシャ神話に由来している（次項参照）。

南米のアンデス地方には，サンポーニャと呼ばれるインカ族の民族楽器があるが，これはトトラ葦製のパンパイプの一種である。この楽器の奏者として，瀬木貴将が，目下ボリビアを拠点に活躍中で，今年も新作CD（瀬木，1999）をレリースしている。インカ族にはほかにケーナという固有の縦笛があるが，ケーナ奏者・岸本太朗による“ヨシ笛コンサート”が，「湖辺ルネッサンス」で催されたことがあり，俳優・田中健は，ケーナ演奏家としても知られる。また，大津市在住の小杉正氏は，琵琶湖産ヨシの横笛で演奏活動を展開されている。

ここで葦笛に因んだ外国の諺となぞんぞを紹介しておきたい。ドイツの諺に，“Wer im Rohr sitzt hat gut Pfeifen schneiden（アシの茂みに坐っている者は容易に葦笛を作ることができる）”というのがあり，これは“環境にさえ恵まれれば良い仕事ができるのは当り前だ”を意味するが，一方では，英国の著作家・フラー（T. Fuller）が，

"Every reed will not make a pipe（すべてのアシがアシ笛になるわけではない）" ともいっている。なぞなぞについては，ウクライナに，"森で切られて，なめらかに削られ，大声で歌っているのはなんというもの?（答え，葦笛）" がある（柴田・谷川ほか，1984）。

次に，リード笛属楽器（有簧楽器）について，簡単に述べる。リード（英語，reed；日本語，舌または簧（した））は，葦，竹，木，金属などで作られた弾力性のある小さな薄片で，これを管楽器（主に木管）の吹口につけ，一方を固定して空気を送り込み，他方を振動させ発音源とするものである。ヨシ製のリードは，オーボエ，クラリネット，サクソフォーン，バッグパイプ，篳篥などで，また金属片のリードは，ハーモニウム，アコーディオン，ハーモニカ，パイプオルガンなどで用いられる。リード楽器は，中近東（西アジア）地方に紀元前数千年からあったらしいといわれ，古代エジプトの壁画に描かれたセビ（sebi）と呼ばれる長い縦笛や二本笛のマム（mam）は芦笛（リード笛）であるという説があり（一説にマムは嘴笛），ギリシャの壷絵などにはアウロス（aulos）と称される二本芦笛が描かれている。葦笛地帯は，中近東地方に多く，これが西は北アフリカから，スペイン半島に，東はペルシャ，インドを経て，インドネシア，中国，朝鮮，日本に拡がった。（中部以南のアフリカには葦笛地帯がなく，アメリカインディアンもこの種の笛を持っていなかった）。なお，オーケストラ楽器には，一枚舌（シングルリード）のクラリネット，サクソホーンと二枚舌（ダブルリード）のオーボー，イングリシュホルン，ファゴット，コントラファゴットなどがある。

雅楽に用いられるリード楽器には，篳篥と笙があるが，前者のリードは葦製で蘆舌（ろぜつ）と呼ばれ，後者のそれは金属製である。篳篥（胡人の笛）は，古代アジアに起り，西域，中国を経由して，奈良朝の頃わが国に伝来したオーボエ系の縦笛で，雅楽の主旋律を分担し，強大な音を出すため，「枕草子」（第181段）では，"ひちりきはいとむつかしう，秋の虫をいはば，轡虫などに似て，うたてけ近く聞かまほしからず。ましてわろう吹きたるはいとにくきに" と嫌われている。篳篥は，「更級日記」，「禁秘抄」，「古今著聞集」などの古典にも出てくる。篳篥の蘆舌の作り方は，「雅楽；伝統音楽への新しいアプローチ」（増本，1968）に詳しい説明がある。

＜付記＞

①往年の宝塚のトップスター・葦原邦子に「葦笛」と題する著作がある。②江戸時代（宝永の頃）に芦笛という号をもつ伊丹の俳人がいた。③蘆笛長穿孔虫（ヨシブエナガキクイムシ，*Platypus calamus*）は，ナガキクイムシ科の昆虫である。④滋賀県が昭和6年度に完成した近江八幡市，安土町，能登川町を縫って走る大規模自転車道路の名は，"びわ湖よし笛ロード" である。

## ギリシャ神話と花言葉

前項でパンパイプにふれた序でに，ここでギリシャ神話をとりあげることとし，併せて，それらの神話に基づいたヨシの花言葉を紹介する。

### 1）ギリシャ神話

①［パンとシュリンクスの話］　Archadia の妖精シュリンクス（ギリシャ語でヨシの意味）は，言い寄る牧羊神パンに追われて Ladon 河の岸に逃げ，神に願ってヨシに変身した。パンがこれを手折ってアシ笛（パンパイプの名前の由来）を作り，これを吹きながらシュリンクスをしのび嘆いた。この伝説に基づいて，フランスでは，マラルメ（S. Mallarme）が長詩「半獣神の午後」を著し，ドビュッシー（A.C. Debussy）が "牧神の午後へ

の前奏曲”を作曲している。英詩でも，マーヴェル（A.Marvell）が「庭園」の中に，またブラウニング（E.B. Browning）が，「楽器」の中に，この偉大な牧神パンを登場させており，別にミルトン（J. Milton）は，「リシダス」で，“声たてる葦（vocal reeds)”と“麦の笛”とを比較している。なお，パンが最初に笛を収めた洞がエフェソス（Ephesus；Diana 神殿の所在地）にあり，真の処女ならシュリンクスの調べが聞こえて扉が開き，松の冠を戴いてここから出てくることができるが，偽りの処女の場合には，ここから帰還できなかったといわれる。

②［ポリュペモスとガラティアの話］　一つ目の巨人ポリュペモスは，海の神ガラティアに恋をし，恋敵である羊飼の青年アキスを嫉妬に狂って殺してしまう。ガラティアは，深く悲しみ川辺のヨシに変身した。

③［ミダス王と理髪師の話］　小アジアのフリギア（Phrygia）のミダス（Midas）王は，手に触れる物すべてが黄金になるように願い，それがかなえられたが結局困ってしまったという話でよく知られる。この王は，アポロ（Apollo）の竪琴よりもパンのアシ笛の方がずっと優れているといったため，アポロによって耳をロバの耳に変えられてしまう。この秘密を知っている理髪師が，口外しそうな不安におびえ，土に穴を掘って，“王様の耳はロバの耳”とささやいてから穴を埋めたところ，やがてそこに一本のヨシが生え，それが風にそよいで出す音が，“ミダス王の耳はロバの耳”と聞こえたという。ローマの詩人オウィディウスが残した叙事詩「Metamorphoses」（「転身（変身）物語」）の中にもこの話が出ている。

### 2）花言葉，誕生花，相性花，花占い

ヨシの“花言葉”は，本によっていろいろであるが，いずれも上掲のギリシャ神話のいずれかに基づいている：深い愛情（瀧井，1990，1994）；後悔，不謹慎，音楽，神の信頼（池田書店，1990））；音楽，愛想（加藤，1976）；音楽，憂愁（居初，1976)。

ヨシは，12月8日の“誕生花”で（瀧井，1990)，その“相性花”（この日生まれの人に贈れる四季の花）は，＜春＞カリフォルニア・ポピー，＜夏＞アマリリス，＜秋＞バラ，＜冬＞スイートピーである（瀧井，1994)。また，ヨシの“花占い”については，次のように記されている（瀧井，1990)：ほめことばに弱く，おだてに乗りやすいあなた。当てにならない人を頼りにする傾向があります。外見上は強そうなのに，実際は気の弱い人。愛は深いので，思い込んだら命がけのところがある。人を見る目を養うことが大切。でないと，心は沈むばかり。幸せになる資格は充分にあるのですから。

### 葦の尖筆，葦ペン

メソポタミアのシュメール人は，原始的な人類最古のウルク絵文字（紀元前3100年頃）から楔形文字を発明し（紀元前2500年頃)，それを葦の茎で作った尖筆で粘土板に書き，乾かして保存していた。古代エジプト時代には，パピルスの巻紙に葦ペンでヒエログリフ（象形文字）が記録された。ヒエログリフでは，“葦の花（穂)”1本でiを，2本ではyをあらわし，“よしず張りの圍い”は，hに対応する。カイロ博物館には当時の書記の座像が，また大英博物館には，書記のパレットとかアハメス一世時代やトトメス四世時代の葦ペンが所蔵されている（吉村・NHK取材班，1990)。

イギリスの詩人・ブレーク（W. Blake）の詩集「無垢の歌」の序詞の中に次の一節がある（加藤，1976)：And I pluck'd a hollow reed，And I made a rural pen，And I stain'd the water

clear, And I wrote my happy songs Every child may joy to hear (私は空洞のヨシを折り，ひなびたペンをこしらえて，清水の色をあいに染め，どんな子どもも聞きほれる楽しい歌を書きつけた。)。

「世界のなぞなぞ大事典」(柴田・谷川ほか，1984) には，“葦ペン” を正解とする各国のなぞなぞが6問収録されているが，そのうち4問を以下に引用する：＜アフガニスタン＞舌で世界を征服，首は偉大なる王者の手にふれる。もし，首を切られたらだれでも死ぬけれど，この首ばかりは切られると，ますます生きかえるものってなあに。＜パキスタン＞ある人が歩き回って疲れ果てた，小刀で首を切れ，また歩き始めよう。＜イラン＞その子供時代にはロバがそれを食べ，国の王さまがそれで税を取る。もしそれが背いて頭を上げると，刀で首が斬られる，それは白い道を歩み，黒い水を飲む。＜アラブ＞細みの体，上に隣接するものの部分を切り取られ，口もきけないのに弁論者の通訳を行う。その寿命が長くなれば，なるほど背が低くなる。声を出すわけでもないのに，雄弁を顯わにする。

わが国にも，管がヨシ製の “葦筆” と呼ばれる毛筆があり，伊勢の浜荻筆は三重県の名産品として有名であった。

葦ペンは，文字を書くためだけではなく，画筆としても用いられてきた。特にこれを愛用したのは，ゴッホ (V. van Gogh) であり，彼は葦ペンだけで，またはそれと他の用具とを併用して，全部で80余点の作品を制作した。ここで，「ヴァン・ゴッホ全画集」(フルスカー，1978) の解説文の中から，“葦ペンを用いた名人芸：アルル (Arles)” と題された項を引用する：ヴィンセントは2枚の素描を (弟の) テオに送ったとき，書翰478で言っている。「こうした素描は鵞ペンのように切った葦で描いたものだ。ぼくはひとつのシリーズを考えている。そしてはじめのふたつより良いものが描ければと思っている。それは，ぼくがオランダで試した技法だが，当時はここにあるような良質の葦が手に入らなかったのだ。ヴィンセントの言葉遣いから，葦ペンによる制作は，彼の意欲をかき立てる新しい経験だったことは明瞭だ。共通の友人であった画家コーニングにふれ，彼は次のごとく続ける。「ぼくは彼に手紙でこの技法のことを知らせてやるつもりだ。そして彼もそれを描けるように，切った葦を送ってやろうと思う。」(「それ」とは「葦ペンの素描」という意味である)。上述の一連の小素描の大部分は葦ペンか，葦ペンとふつうのペンを使って描かれ，ヴィンセントは新しい媒体を使って，デッサンの名人芸を素早く身につけていった。一般に葦ペンを使うと，ふつうのペンより重いストロークとなる---しばしば，二重のストロークともなる。これらの素描で，ヴィンセントは従来見られなかった決断と力を込めて制作しているが，同時に筆遣いは最小限に抑えていた。

今の日本にも，葦ペンの魅力にとりつかれた二人の画家がいる。一人は福岡県飯塚市に在住し，カルチャーセンターで葦ペン画教室を開き，「葦ペンスケッチのすすめ」(諸藤，1996) などの著作がある諸藤浩之画伯，もう一人は長野県出身 (アトリエは，東京都調布市) の小松欽画伯である。小松画伯は，自著「葦の詩 (あしのうた)」(小松，1989) の中で，“私の葦ペン” と題し次のように書いておられる：葦を画筆にして描いている画家は私だけではない。多くの画家達が一度は手に染めているようである。ただ私のような荒い，激しい線を描くためには，直径1.3～1.5センチ位のものでないと使用に耐えない。それは輪郭やデッサンを描くためではない。油彩の筆をたたきつけるように絵を描くものだから。多摩川の葦を画筆にしてから十数年が経つ。多摩川も様変わりが激

しく，川底をさらうブルドーザーが何のためらいもなく根こそぎ掘り起し，きちんと護岸工事が終ると二度と葦は生えて来ない。私の採集地も追われ追われて，今年で終りでないかと毎年淋しい想いをしている。近年中に多摩川からペンになる葦が消える事は確実であろう。瑞穂の国と言われる日本に，葦の絶える事はないと信じつつ，人類と長いかかわりをもつこの葦に，強い愛着を，持たないではいられない。

## 葦　紋

“葦舟”の項で葦舟紋様に少しふれたが，“ヨシと紋様”については，他にも，雁・鴨・鷺・鶴・舟などとヨシとを組み合わせた伝統的な図柄の絵画・工芸品・陶磁器・衣裳の名品が数多く残っている。しかし，字数の制約もあるので，それらの紹介は省き，ここでは，“家紋”と“葦手”に関して略述するにとどめるが，この方面に興味をお持ちの方は，総説「葦のデザイン」(金氏，1993) を参照されたい。

### 1) 家紋

「日本家紋総鑑」(千鹿野，1993) によれば，日本の家紋には約 100 種類の植物があらわれ，そのうちパターン数が多いのは，梅 (785 通り)，菊 (506 通り)，竹，柏，笹などである。同書には，次にあげる 37 の芦紋の図が掲載され，使用家が示されている：新見 (にいみ) 芦，丸に折れ芦の葉，子持ち八角に折れ芦の葉，抱き芦の葉，丸に中陰抱き芦，陰丸に抱き芦，丸に上がり違い芦 (2 種)，丸に変わり違い芦 (2 種)，石持ち地抜き違い芦の葉，丸に違い芦の葉 (2 種)，丸に大小二つ芦の葉，石川芦，三枚芦の葉，丸の内に雪輪に三つ芦，芦の葉巴，抱き違い芦，丸に芦の葉井筒，丸に芦菱，抱き芦，変わり抱き芦，割り抱き芦，丸に抱き芦に一文字，中陰抱き芦に花菱，抱き芦の葉に五三桐，花付き抱き芦，陰抱き芦，抱き芦に対 (むか) い雀，丸に芦に雀，陰抱き芦に対い雁，丸に乱れ芦の葉，抱き芦の葉に対い雁，割り抱き芦に対い雀，五つ追い芦の葉丸に浮線蝶，芦の丸。

他の参考書に掲載されたものを加えると芦紋は 43 種あり，簾を紋にしたものも 1 種あり，磯島高等学校 (大阪府枚方市) の校章は芦紋である (金氏，1993)。

西洋の紋章には，一般に植物をモチーフにしたものは少ない。筆者が現在知る限りでは，ヨシに多少関係がありそうなのは，“白ユリ紋章”としての “Fleur-de-lis” のみである。この紋章について，加藤 (1976) は，次のように述べている：フランス王紋のこの花は一応 iris だというが，そもそもこれが花であったのかどうか。(略) 種々な憶測や異論が多く，古来，これほど物議をかもしている紋章はほかにない。(略)。花とする説では，iris でも lily でもなく，フランク族の王が王錫代わりに用いた reed の花だとする説もある。

### 2) 葦手 (あしで) (水手 (みずで))

葦手は，平安時代に行われた文字の戯書 (ざれがき) で，水辺に葦などの生えた風景に流水，水鳥，松，草などの形を仮名，漢字で絵画化して描いたものである (葦手を“散らし書き”とみる説があるが，そうではないとの主張もある)。葦手という言葉は，「宇津保物語」，「源氏物語」(若菜，梅枝，浮舟)，「栄華物語」，「住吉物語」などにみえる。現存最古の葦手は，「西本願寺本三十六人集」(書写年代は元永 3 年 (1120) ごろ) の「躬恒集」，「忠岑集」，「順集」，「元真集」の料紙の下絵に墨で描かれているものであり，そのほか代表的な葦手書としては，伝西行筆「中務集」，伝藤原俊成筆「元輔集」，藤原伊行書写「和漢朗詠集」(一

名,「葦手下絵和漢朗詠抄」),厳島神社所蔵の国宝「平家納経」や「桧扇」,鎌倉末期の「枕草子絵巻」,伝藤原公任筆「葦手様歌切」(刺繍)などがあげられる。また,葦手絵紋様をもつ美術工芸品としては,「梅蒔絵手箱」(三島大社),「長生殿蒔絵手箱」(大倉文化財団),「秋草蒔絵歌書箱」(前田家),「塩山蒔絵硯箱」(文化財保護委員会),「小倉山蒔絵硯箱」(沖本家),「春日山蒔絵硯箱」(根津美術館),「花白河蒔絵硯箱」(根津美術館),「近江八景文様加賀友禅小袖裂」(東京国立博物館),「時雨螺鈿鞍」(永青文庫,国宝)などが有名である。飾剣の一種で葦手剣と呼ばれるものは,蒔絵の鞘に螺鈿を葦手模様に飾った太刀で,吉事に佩用された。

なお,石川淳の短編小説に「葦手」があり,また「作庭記」に庭園内の池や細流の汀における立石様式の一つとして“芦手の様(あしでのよう)”というのが出ている。

<付記>

①1995年4月25日郵政省発行の弔事用50円切手は,「葦に流水模様」(原画,礒田尚男)。②葦毛は,馬の毛色(毛の紋様)。③大阪府の府花は葦。④滋賀県安土町の町の花はヨシ,町の鳥はヨシキリ。

## 人　名

### 1) 日本の人名

日本の苗字(姓氏)の種類は,諸説があるものの,総数は10万～15万の範囲とみなされている。それら膨大な姓氏の中で,葦田は最も古く,古代の戸籍簿である「新撰姓氏録」に既に葦田首が出ている。また,蘆のつく姓氏で歴史上有名なのは,鎌倉時代から戦国時代にかけて会津地方を領した豪族で,天正17年(1589)に伊達政宗の侵攻を受けて滅亡した蘆名氏がある。

筆者がこれまでに各種の参考書(日本ユニバック株,1978a,1978b;日外アソシエーツ株,1988,1990,1994,1998;高信,1993)から収集した“葦,蘆(芦),または葭”の文字を含む日本の人名(苗字,名前,号など)は,おびただしい数にのぼる。苗字についてだけでも,215種類に達するが,それらの中から“興味深いもの”,“難読・稀少なもの”の例を選んで以下に示す(特に重要と思われるものには,下線を付した):あかね(葭),あし(葦),あし(芦),あし(葭),あし(蘆),あしうら(葦占),あしうらい(葦占),あしお(芦生),あしおい(蘆生),あしかい(蘆界),あしがき(芦垣),あしがき(蘆垣),あしがはら(芦ケ原),あしがや(芦ケ谷),あしがや(蘆萱),あしかり(葦刈),あしかり(葦苅),あしかり(芦刈),あしかり(芦苅),あしがり(葦刈),あしがり(葦苅),あしがり(芦刈),あしがり(芦苅),あしき(葦敷),あしき(芦敷),あしき(芦木),あしくち(芦口),あしぐち(芦口),あしけぶ(芦花部),あしこうち(芦河内),あしこうち(蘆河内),あしさこ(芦硲),あししま(芦島),あししま(蘆嶋),あしず(葦洲),あした(葦田),あした(芦田),あした(葭田),あした(蘆田),あしだ(葭田),あしたかえ(葦高江),あしだがわ(芦田川),あしたち(芦立),あしたて(芦館),あしだて(芦立),あしたに(葭谷),あしだの(葭田野),あしたね(葦胤),あしち(蘆地),あしな(芦品),あしな(蘆那),あしな(蘆品),あしな(蘆名),あしなざわ(芦名沢),あしなざわ(蘆名沢),あしぬま(芦沼),あしの(芦埜),あしのうら(葦占),あしのはら(芦ノ原),あしは(葦葉),あしは(蘆葉),あしば(芦葉),あしばこ(蘆馬),あしはざま(芦迫),あしはざま(蘆迫),あしはま(葭浜),あしはら(葦原),あしはら(芦原),あしはら(蘆原),あしふ(蘆

生)，あしべ（芦部)，あしべ（芦辺)，あしべ（蘆部)，あしべ（蘆辺)，あしほり（葦堀)，あしぼり（葦堀)，あしま（葦間)，あしま（芦間)，あしま（芦馬)，あしみ（芦見)，あしみ（蘆見)，あしみず（芦水)，あしみた（葦田)，あしみね（芦峯)，あしむろ（葦室)，あしもと（葦本)，あしもと（芦本)，あしや（葦屋)，あしや（葦家)，あしや（葦宿)，あしや（芦屋)，あしや（芦矢)，あしや（蘆屋)，あしやはら（芦谷原)，あしやま（葭山)，あしゅう（葦敷)，あしわけ（芦分)，あしわたり（葦渡)，あしわら（葦原)，あしわら（芦原)，あしわら（蘆原)，あわ（葭)，あわがいり（葭ケ入)，いこう（葦航)，かすい（葭井)，ししわたり（葦渡)，すす（芦)，すすお（芦尾)，すすお（蘆尾)，すすき（芦)，すすきお（芦尾)，すすきお（蘆尾)，みずあし（水芦)，よし（葭)，よしあし（葭芦)，よしい（葭井)，よしうち（葭内)，よしうら（芦浦)，よしうら（蘆浦)，よしえ（葭江)，よしおか（葭岡)，よしかわ（葭川)，よしさき（葭崎)，よしざき（葭崎)，よしさわ（葭沢)，よしざわ（葭沢)，よしすみ（葭住)，よしずみ（葭住)，よした（芦田)，よした（葭多)，よした（葭田)，よしだ（芦田)，よしだ（葭多)，よしだ（葭田)，よしたけ（葭竹)，よしたに（葭谷)，よしなか（葭中)，よしなか（葭仲)，よしの（葭野)，よしば（葭葉)，よしはま（葭浜)，よしはま（葭濱)，よしはら（葭原)，よしみ（芦見)，よしみ（蘆見)，よしむら（葭村)，よしもと（芦本)，よしもと（葭本)，よしもり（葭森)，よしや（葭家)，よしや（葭谷)，よしや（葭矢)，よしやす（葭安)，よしやま（葭山)，よしわら（葭原)，ろ（芦)，ろあん（芦庵)，ろこう（芦港)，ろこう（蘆港)，ろちゅうし（芦中子)。

音が“悪し”に通じることを嫌い，芦（蘆)，葦，葭の文字を佳，吉，喜，嘉，好，愛，美，能，芳，義，良，賀，誉士，足，脚，味などに転化させた苗字もあり，それらをも加えると，“アシ・ヨシに由来する姓氏”は，さらに増えることになる（現在，芦田姓は約3万人，吉田姓は約60万人)。

名前や号に，“芦（蘆)，葦，葭”の文字を含む例も多数あるが，本稿ではそれらを列挙することはやめ，以下に，姓・名・号にこれらのどれかを含む著名日本人を分野別に少数例あげるにとどめる：＜神話・伝説＞葦田宿禰，葦原色許男（醜男)，可美葦牙舅神（宇摩志阿斯訶備比古遅神)，葦那陀迦神，芦屋菟原処女，蘆屋道満（道摩)；＜政治・法学＞芦田均，芦部信喜；＜教育＞芦田恵之助，芦原義信；＜文学＞蘆谷蘆村，小沢蘆庵，徳富蘆花，火野葦平；＜芸術＞芦田淳，長沢蘆雪；＜芸能＞芦田伸介，芦野宏，芦乃家雁玉，蘆原英了，葦原邦子，芦屋雁之助，芦屋小雁，小金井芦州。

上掲の有名人のうち，徳富蘆花についてだけは少し書き記しておきたい。中野好夫は，その著「蘆花徳富健次郎第一部」（中野，1972）の中で，雅号・蘆花の由来に関する諸説を紹介したあと，“要するに彼は蘆の花が好きだったらしいのである”と結んでいる。実際，蘆花は，自著「自然と人生」中の「蘆花」と題する短文の冒頭部において“「蘆の花は見所とてもなく」と清少納言は書きぬ。然も其見所なきを余は却って愛するなり。東京近郊にては，洲崎より中川尻江戸川尻のあたりにかけて，一帯の蘆洲なり。秋の頃品川新橋間の汽車の窓より眺むれば，洲崎而東海に沿ふて茫々たる色は即ち蘆花の雪なり。（以下略)。”と書いている。なお，東京都世田谷区にある都立“蘆花公園”（“蘆花恒春園”）は，徳富蘆花の旧庭である。徳富蘆花のほかに今一人ヨシを好んだ文人をあげるとすれば，それは永井荷風であろう。彼は，江戸の名残りを懐かしみつつ，荒川放水路のあたりを日和下駄とこうもり傘の姿でよく散策したが，「放水路」（昭和11年）と題する随筆の中で，“放水路の眺望が限りもなくわたくしを喜ばせるのは，

蘆荻と雑草と空との外，何物をも見ぬことである”と記し，それに続く文で，開発が進みヨシ原が消え失せたことを嘆き，放水路散歩から遠ざかったと告白している。

### 2) 外国の人名

英和辞典には，Read は男子の名，Reada は女子の名，Reed は Read の別称，とある。Reed はまた苗字の場合もあるので，ここに数人の著名な“Reed さん”を紹介しておく：[Austin Reed] 英国王室御用達の紳士服店の創業者。現在，創業者の名の本店は，ロンドンのリージェント・ストリートで営業。[Sir Carol Reed] 英国の映画監督。作品に「邪魔者は殺せ」，「落ちた偶像」，「第三の男」など。[Mrs. Reed] シャーロット・ブロンテ作「ジェイン・エア（「Jane Eyre」）」中の登場人物。3 人の子供（Eliza，John，Georgiana）の母。[Walter C. Reed] 米国の細菌学者。黄熱病が一種の蚊によって伝達されることを確認。なお，[蘆 (lu)] は中国の姓の一つである。

## 地　名

### 1) 日本の地名

「記紀」・「万葉」に出て来る“葦原瑞穂国”が日本国の美称であったことは先述したが，「万葉集」には次の“アシ地名”もある：①葦北（あしきた）；現在の熊本県芦北郡芦北町で，野坂の浦がある。②芦城駅家（あしきのうまや）；福岡県筑紫野市阿支岐，太宰府の近くにあった駅家。③葦木乃河（あしきのかわ）；葦木山のすそを流れる川。④芦城野（あしきのの）；阿支岐の地の原野；⑤葦木（悪木）山（あしきのやま）；芦城の地の山（宮地嶽かという）。⑥葦屋，芦屋（あしのや）；菟原処女（うないおとめ）の伝説地（現，芦屋市）。⑦安之保夜麻，葦穂山，足尾山（あしほやま）；茨城県。

わが国の古典や図会には，他にもしばしばアシ地名がみられる：例。①「源氏物語」：葦（蘆）田原（朝原），芦和歌浦。②「伊勢物語」：蘆の屋，蘆屋の灘。③「おくのほそ道」：芦野の里（奥州街道の宿駅；那須郡那須町芦野）。④「江戸名所図会」：葦毛塚（現，東京都目黒区；頼朝卿の乗った葦毛馬の斃れたのを埋めた旧跡）。⑤「紀伊国名所図会」：蘆辺浦（和歌山県）。

また，承平年中（931～938）に，源順が著した日本最古の漢和辞書「倭名類聚鈔」（略称「和名抄」）には，①アシ地名として，摂津国免原郡葦屋郷，陸奥国安積郡葦屋郷，伊勢国三重郡葦田郷，参河国渥美郡高蘆郷，駿河国志太郡葦原郷，下総国援島郡葦津郷，播磨国穴粟郡安志郷，備後国葦田郡葦浦郷，肥後国葦北郡葦北郷が，また②ヨシ地名（吉，良は葦の佳名）として，周防国吉敷郡，伊予国周敷郡吉田郷，讃岐国多度郡良田郷，長門国厚狭郡良田郷，常陸国那珂郡吉田郷，下総国印旛郡吉高郷，大和国吉野郡吉野郷，伊予国和気郡吉原郷，伊予国久米郡吉井郷，讃岐国那珂郡良野郷，が記載されている。

こうした地名があったことは，かってわが国のいたるところに豊かなヨシ原が存在していたことの証拠であり，その名残りとして，今の日本にも，“葦・蘆（芦）・葭”の字を含む地名が全都道府県にわたって広く分布している（名前の由来となったかんじんのヨシ原が，現実には消失してしまっている所も多いであろう）。筆者が，「角川日本地名大辞典」のシリーズやその他の参考書（鏡味・鏡味，1978；金井，1991；日外アソシエーツ株，1985a，1985b；小川，1987）から採録した現在の“アシ・ヨシ地名”は多数にのぼるが，それらの中からほんの一部を選び以下に列記する：①＜市町村など＞：相葭（あいよし），福島県；芦浦（あうら），滋賀県草津市；芦生（あしう），京

都府；芦刈町（あしかりちょう），佐賀県；芦川（あしがわ），山梨県；蘆（足）久保（あしくぼ），静岡県；芦峅寺（あしくらじ），富山県；芦田（あしだ），長野県；芦田町（あしだまち），広島県；蘆野（あしの），芦の浦（あしのうら），佐賀県；栃木県；芦原（あしはら），佐賀県；芦辺町（あしべちょう），長崎県；芦別市（あしべつし），北海道；芦屋市（あしやし），兵庫県；芦安村（あしやすむら），山梨県；芦屋町（あしやまち）福岡県；豊葦（とよあし），長野県。②＜河川＞：芦田川（あしだがわ），広島県；芦別川（あしべつがわ），北海道；芦屋川（あしやがわ），兵庫県。③＜沼・湖＞：芦沼（あしぬま），栃木県・青森県；芦ノ湖（あしのこ），神奈川県；芦野湖（あしのこ），青森県。④＜山＞：葦嶽山（あしだけやま），広島県；芦原峠（あしはらとうげ），奈良県；芦別岳（あしべつだけ），北海道。⑤＜温泉＞：芦ノ牧温泉（あしのまきおんせん），福島県；芦ノ湯温泉（あしのゆおんせん），神奈川県；芦安温泉（あしやすおんせん），山梨県；芦原温泉（あわらおんせん），福井県；葭ケ浦温泉（よしがうらおんせん），石川県。⑥＜城＞：葦陽城（いようじょう：別名；旗追山（鉄覆山）朱雀院久松城，福山城），広島県；芦城（ろじょう：別名，小松城），石川県。⑦＜道路＞：びわ湖よし笛ロード（滋賀県）；芦有道路（ろゆうどうろ；芦屋市と有馬温泉を結ぶ道路）。

地名の場合にも，人名と同様に，“葦・蘆（芦）・葭”を縁起のよい他の文字に転化させた例が数多くみられる。「災害と植物地名」（小川，1987）には，この“転化”のことを含め，次の内容の記載がある：a）アシ地名の地形は，多彩で，足，悪し，などの用字もある。アシの意には，①サの転訛語で，湿地，低湿地；②アス，アズの転訛語で，くずれ地。崖；③山地地名もあり，地すべり地形であるところをみれば，②のアス，アズでくずれ地からきたアシであろう；④植物のアシの生えたところもあるか，アシヤ（芦屋）アシツ（葦津）など。②および③を証明するような災害も実際に起こっている（例。昭和41年の台風による洪水時に，山梨県芦川の土石流を伴った災害）。b）静岡県東部の死火山・あしたかやま（愛鷹山）は，植物のアシの文字はつかないが，同義地名とみなされる。c）災害の有無は別として，アシ地名を拾ってみれば，足尾山，足柄山（峠），芦刈町，芦川，葦北（芦北），足摺，芦田，芦田川，愛鷹（あしたか）山，芦野，芦ノ湖，芦ノ田池，芦ノ牧，芦浜，芦辺，芦屋，芦安，などがある（筆者注．東京都の“足立”区の語源は“葦立ち”に由来）。ヨシ地名は最近まで，芦，葭の生えた湿地のあったところが多く，現在でも，さぞ昔は芦，葭の生えたところであったろうと思われる土地である。したがって，湿地地名である。地名例，“葭，吉野，芳野など”。また。鏡味・鏡味（1978）は，「地名の語源」の中で，“悪しに通じるので，アシ地名は，交通の困難な所，または葬地などに関係があり，芦谷，足谷，芦倉，足堀，足山，悪谷などはその例であるが，アシを反対語のヨシにいいかえた地名に葭原，吉原，吉沢などがある。”と述べている。

“転化”の代表例として，“葭原→吉原”につき，簡単に説明しておく。元和3年（1617）に，それまで市中に散在していた遊女屋が葺屋町（現，中央区日本橋人形町付近）に集められたが，その土地は，埋立てた湿地で，ヨシが繁茂していたので葭原（よしわら）と呼ばれた。その後，吉原（元吉原）に改称され，さらに明暦の大火（1657）のあと千束日本堤下三谷（現，台東区浅草北部）に移転してからは，新吉原と称された。以下，葭原（吉原）遊廓に関係のある用語・比喩・諺の類をあげる：［葭原（吉原，葦原）雀（よしは（わ）らすずめ］①ヨシキリの異名の一つ（葦雀，葭雀（よしすずめ）とも），季語，夏，②転じて，騒が

しいほど多弁な人（“葦原雀でかしましい”），③（②の洒落として）吉原遊廓の消息に通じていろいろ吹聴する者，吉原に出入りする幇間・素見（すけん）などの連中の譬え，④長唄の曲名（初代桜田治助作），「教草吉原雀」の通称。⑤（④をもとにした）清元の題名（三升屋二三治作詞・初世清元斎兵衛作曲；「新吉原雀」とも）；［葦原貝（よしわらがい）］貝台（いがい）の江戸方言。［吉原俄（にわか）］江戸吉原で行われた即興劇。［吉原が明るくなれば内が闇］吉原が繁盛すれば，そこで遊ぶ人の家庭は暗くなる（衰微する）。［吉原は女郎千人客一万人］吉原遊里の隆盛ぶりの譬え。

葺屋町・堺町に隣接する江戸堀江六軒町（東京都中央区）の俗称は，葭町ないし芳町（よしちょう）で，ここは明和・安永の頃，陰間茶屋の本場として繁盛した。駿河国富士郡下方庄の内（静岡県富士市）にも吉原という名の東海道五十三次の宿駅があり，また大阪新町遊廓の中に，葭原（吉原）町という通り筋があった。

ヨシ（アシ）地名由来の特産品のうち，食品については“食文化との係わり”の項で既述したので，それ以外の例をあげておく：①［葦野石（あしのいし）］栃木県那須町蘆野で産出する石で，土木・建築に利用，館山石とも。②［芦（蘆）屋釜（あしやがま）］福岡県芦屋町で，室町時代に鋳出された茶湯釜の優作の呼び名，その後各地で類似品（越前芦屋，播州芦屋，伊勢芦屋，博多芦屋，肥前芦屋，越前芦屋，石見芦屋，伊予芦屋など）が作られた。③［葦焼（あしやき）］古く大坂で製した陶器で，難波が葦の密生地として有名だったところからこの名がある，難波焼とも。

### 2) 外国の地名

中国北京市南部の永定河にかかる蘆溝橋（＝盧溝橋）は，日中戦争の発端となった蘆溝橋事件（1937）で名高い。中国にはまた，李白や蘇東坡の詩で有名な廬山にゆかりの地名・蘆州（＝廬州）があり，武田泰淳が「蘆州風景」（「廬州風景」とも）という小説を書いている，なお，蘆洲は，ヨシが生えた洲をあらわす一般用語でもあり，南宋前期の詩人・陸游は，“蟹舎正対蘆花洲”という句を残している。台湾には，蘆山温泉がある。

「聖書」にしばしば出てくる“葦の海”（英語；Reed（Read，Red）Sea：ドイツ語；Schilfmeer）は，紅海あるいはアカバ湾をさす語である（語源には，諸説）。

＜付記＞　今津町教育委員会（1980）編集の「葦海の足音」の書名は，“今津平野の大部分が，かってはおびただしく葦の生え茂った葦海であった”ことに基づいている。

## 文学作品名

“ヨシ（アシ）と文学との係わり”は，遠く「記紀」・「万葉」やギリシャ神話に始まり，爾来，両者の“密接な関係”は，今日に到るまで連綿と続いている。

筆者が，これまでに採録したヨシ（アシ）に因んだ古今の和歌，狂歌，俳句，川柳の数は優に1万を超えている（参考。「小倉百人一首」のうち，伊勢，源経信，皇嘉門院別当の3首，また最近の「近江百人一首」（選者，近藤芳美）のうち，田上川（源経信），筑摩江（恵慶），津乎の崎（若湯座王）の3首は，ヨシを詠み込んだ歌）。また，ヨシ（アシ）関連語句は，ほとんどすべての日本古典に現われ，それ以降の小説・随筆・詩歌などの中にもしばしば用例がみられる。これらの語彙をすべて列挙するには，紙幅が足りないので，本稿では以下に，“あし・葦・蘆（芦）・葭”の文字を含む内外の文学作品名を若干あげるにとどめる：＜小説＞「蘆刈」谷崎潤一郎，「葦手」石川淳，「葦と弓と馬；壬申の乱を歩く」三浦昇，「葦と百

合」奥泉光,「葦は見ていた」山本周五郎,「蘆火野」船山馨,「芦屋夫人」武田繁太郎,「傷ついた葦」曾野綾子,「徳川家康｛4｝葦かびの巻」山岡荘八,「蘆屋家の崩壊」津原泰水,「葦切り」庄野潤三;＜随筆＞「芦毛のアン」高橋直子,「葦笛」葦原邦子,「パスカル-考える葦の意味するもの」前田陽一。「もの思う葦」太宰治;＜詩集＞「葦」(「葦の歌」,「あしの曲」) レーナウ (N. Lenau),「葦毛の種馬」ジェファーズ (R. Jeffers),「葦の閲歴」秋谷豊,「あしの葉」北原白秋,「葦間の風」イェイツ (W. B. Yeats),「芦間の幻影」三木露風;＜和歌＞「あしかび」小沢蘆庵,「排蘆小船」本居宣長,「呵苅葭」本居宣長;＜狂歌＞「蘆の角」蘆原蟹丸;＜俳諧＞「蘆刈」水原秋桜子,「蘆の錦」三宅嘯山,「あしわけ舟」松井編 (白鵠秀逸集),「芦分船」不角編,「冠付芦わけ道」亀貫編,「雪蘆抄」水原秋桜子;＜読本＞「葦牙双紙」鉄格子波丸作, 石田玉峰画;＜地誌＞「蘆分船」(「安志和気艤」) 一無軒道治。

### 比喩, 諺, 格言, 故事, 伝説

ヨシに因んだ“比喩, 諺, 格言, 故事, 伝説”の類いについては, 本稿の所々で折に触れてとりあげたが, 他にもまだ多数の例が内外にあるので, それらの中から若干を拾って以下に示す (本稿中の既出例は略)。ヨシ関連仏教比喩は,「仏教比喩例話辞典」(森, 1987) などに出ているが, ここでは割愛する。

#### 1) 日本, 中国

##### a) 代表的な比喩・諺

[葦鹿 (あし (じ) か;海馬, 海鹿, 海驢とも)] (アシカはよく眠る動物と思われていたので) いつも眠りたがる新造の異称。関連語句:“葦鹿のように眠る”,“葦鹿振”,“葦鹿を使う”,“葦鹿の雌犬”,“葦鹿の黒焼き”,“葦鹿番”,“葦鹿の明番”。[葦 (蘆) 牙 (あしかび (ひ));葦 (蘆) の角 (あしのつの), 葦角 (あしづの);蘆の錐 (あしのきり), 蘆 (芦) 錐 (ろすい);葦若 (あしわか);葭 (葦) 子 (よしご (こ));蘆筍 (ろじゅん)] ①葦の新芽 (若芽), 生命力の象徴。②季語, 春。[葦筒 (あしづつ)] ①葦の地上茎。②葦の茎の内側にある薄紙のようなあま皮 (→葭孚)。③葦筒の;＜一重＞,＜薄し＞にかかる枕詞。[葦の仮庵 (あしのかりお) = 葦の仮屋 (あしのかりや)] (刈りと仮とをかけて) 葦で屋根を葺いた粗末な仮小屋, 仮の宿。[葦の仮寝 (あしのかりね)] (刈りと仮とをかけて) かりそめに一夜を過ごすこと, 仮寝。[葦の枯葉を刈る如し] (枯れ葦は容易く刈れるので) きわめて容易に出来ることの譬え。[葦 (葭) の管 (髄) から天井を覗く (見る)] (ヨシの茎の管を通して天井を覗いてみても, 全体を見ることはできないので) ごく狭い見識だけに頼っていては, 大きい物事は判断できないことのいましめ (“火吹き竹から天を見る”に同じ);(英語) have a narrow (limited) view of things。[葦の葉にもすがる時あり] (水におぼれた時には, 葦の葉にもすがることがあるように) 危急の場合にはささいな物でも大きな助けとなるということの譬え (“おぼれる者はわらをもつかむ”に同じ)。[葦の一葉の宿り] (一枚の葦の葉のような) ささやかな住居。[蘆 (葦) の一夜 (一節) (ひとよ)] ① (葦の一節 (ひとよ) を一夜に言いかけて) 一夜, 一晩。② (葦は節と節との間が短いことから) 短い一夜。[葦の節の間] (葦は節と節との間が短いことから) 短い時間の譬え。[葦 (芦) の穂 (あしのほ)] 葦の花 (円錐花序)。[葦の穂綿 (あしのほわた), 葦絮 (綿) (あしわた) 蘆絮 (ろじょ)] ①葦の穂が晩秋に延びて綿のようになったもの。②①を綿の代用にして作られた粗末な衣服 (→蘆花被);中国二十四孝の故事 (「蒙求」);孔子の弟子・

閔子騫（びんしけん）は継母に憎まれ，これを着せられた。③季語，秋。[あしの迷い]（葦に足を言いかけて）生い茂る葦の間で迷うように，行先を迷うこと。[葦灰（あしばい）飛ぶ]①（立春の日に竹を切って律管を作り，その端に葦の葉を焼いた灰を盛っておくと春気至ると同時に，その灰が自然に飛ぶという中国の俗説から）春になること。②季語，春。[葦原（あしは（わ）ら]①葦の生えている原。②季語，秋。③（俗語）女性の陰毛，女陰。cf。ヨシのドイツ語 Rohr：（卑語）陰茎・男根や膣・ワギナ（"ドイツの比喩・諺"の項参照）。[葦原（あしはら）の道]和歌の道。歌道（"敷島の道"に同じ）。[芦辺鳥に瀬戸鳶，印通寺仏に油断すな]壱岐の芦辺浦の人は口うるさく騒ぎたてる，瀬戸浦の人は鳶が物をとるようにこすっからい，印通寺の人は仏のような顔をしているが実は油断もすきもならない，という近在の人に対する悪口。[葦枕（あしまくら）]葦辺に旅寝すること。[葦間の蟹で横と出る]（蟹が横に歩くことから）態度や行いがつむじ曲がりでひねくれていることの譬え。[一葦の水（いちいのみず）]幅の狭い水の流れ。[葦然（いぜん）]心が感動するさま。[葦巣（いそう），葦巣之悔（いそうのくい）]①葦にかけた鳥の巣。②（転じて）頼るところが確実・堅固でないと，我が身が安全でないことの譬え。[葭孚（かふ）]①葦の茎の内側にある薄い膜（→葦筒）。②（転じて），非常に薄くて軽いものの譬え。[葭孚之親（かふのしん）]①遠き親類。②軽薄でわずかに附着することの譬え。[枯蘆の翁（かれあしのおきな）]俳人・高桑蘭更が"枯蘆の日に日に折れて流れけり"の一句によって得た名声。[枯れた葦に蝶]金銭を目当てに，若い女性が老人に近付くことの譬え。[親族は葦の如く夫妻は瓦の如し]父母や師との縁の重さに比べると，その他の親族，夫婦との縁は薄いということ（一説に，葦の如くは多数の意とも）。[稲麻竹葦（とうまちくい）]（稲・麻・竹・葦の入り乱れる意から）①多種多様なものが群がって入り乱れるさま（「法華経方便品」）。②幾重にも取り囲むように立ち並ぶさま。[葦切（よしきり）が土用に入ったよう]（ヨシキリが土用になると鳴かなくなるように）今まで騒がしくしゃべっていた人が急に黙るさま。[葦切の囀るよう]よくおしゃべりするさま。[蘆衣（ろい）]葦の皮。あしばかま。[蘆花被（ろかひ）]綿の代りに蘆の穂を入れた粗末な夜具（「菜根譚後集」）。被は薄い掛け布団。

**b)「中日大辞典」（愛知大学中日大辞典編纂処，1987）からの引用**

[芦柑 lugan]（植）福建省南部に産するミカンの一種。[芦管 lugan]あし笛。[芦蒿 luhao]（植）カワラニンジン（青蒿）の一種，茎は食用。[芦虎 luhu]（魚介）カニの一種。はさみが赤く，食用にはならない。[芦花鴨子 luhuaya・zi]（鳥）あしの花色に似たアヒル。[芦棚 lupeng]芦を割ったもので編んだアンペラ様のもので掛けた小屋。[芦棚店 lupengdian]アンペラ小屋の貧民用安宿。[芦哨 lushao]あしで作った笛。あし笛。[芦笙 lusheng]アシで作った笙，ミャオ族などの少数民族の管楽器の一（[～舞]蘆笙の伴奏で踊るミャオ族の踊り）。[芦笋 lusun]①アシの新芽（食用）。②（植）（食用の）アスパラガス，オランダキジカクシ。[芦席 luxi]アシの茎を細く割ったもので編んだアンペラのようなもの。[芦竹 luzhu]（植）ヨシタケ（ダンチク），竹に似たヨシの一種。[芦眉子 weimei・zi]葦の茎。[葭念 jianian]＝[葭水 jiashui]＝[葭思 jiasi]＝[葭想 jiaxiang]遠く離れて人を思うこと。

**c）蘆刈伝説，柳田民俗学**

①　蘆刈伝説。「拾遺集」，「大和物語」を典拠とする世阿弥元清作（一説に，禅竹氏信とも）の謡曲に「蘆刈」がある：＜梗概＞津の国日下の里の住人・左衛門（シテ）が，落ちぶれて，後日を契り

夫婦別れをした。妻（ツレ）は都に上り，さる貴人の家で乳母となり，出世したので，三年後にお供（ワキおよびワキヅレ）を連れて故郷へ戻り，夫の行えを探す。そこへ偶々芦売になっていた左衛門が現われ，夫婦は再会を喜びあい，打ちつれて都をさして帰って行く。京都八坂神社祇園会の山鉾“芦刈山”は，この謡曲に取材したもので，その御神体（人形）の頭には。“天文六年（注. 537）酉年六月七条佛師運慶之玄孫式部郷法院康運作”の墨書銘がみられ，山鉾最古の御神体の古衣装（天正銘のある“綾地締切蝶牡丹文片身替小袖”）は，重要文化財に指定されている。

②柳田民俗学。筑摩書房刊「定本　柳田国男集（新装版）」（全31巻＋別巻）には，“ヨシと民俗学”に関する事例が各巻に含まれている。それらの内容を紹介するには，字数が足りないので，ここでは以下に，同全集中の主たる事項と収載箇所（巻-頁）を示しておく（特に興味深いものには，下線を付した）。［蘆（葦）］1-293，2-340，5-133，181，21-324，24-206，30-145：～の茎，5-133；～の松明，5-181；～の穂綿；14-21［蘆王神］12-256［葦男大明神］12-260［葦が作］26-199［あしからじ］1-347［蘆苅］1-50，278，347：～の歌，8-364；～の翁，18-189［蘆苅と云ふ部落］1-347［蘆苅俊蔵］1-347［蘆苅話］1-50，280［あしかりけり］1-347［あしかりけりと云ふ秀句］1-280［葦毛，蘆毛］9-280，10-253，492，11-417，17-79，27-63，86，95，111，112，113，136，316，335［葦子萱子］8-8［葦島］5-80［蘆津山］4-470［芦田（姓）］3-287［葦多弓（あしたて）神社］27-363［葦で目を突かれた］5-133［葦名家］12-205［蘆名家］2-288［「葦乃若葉」］5-266［葦原国］6-286［葦原醜男命（葦原志挙乎之命）］6-304，11-111，12-95［葦原中つ国］1-357［葦船］9-185［蘆屋］2-120［芦屋浦］9-186［蘆屋道満］20-107，27-239［芦屋念仏］9-371［「芦分船」］26-201［茅葺き（萱葺き）］1-248，22-322［茅屋（萱屋），茅屋根（萱屋根）］16-423，21-80，318，321，322，332，333［「芦分船」］26-201［粥占灰占］5-62，442，10-247，12-371，381，13-263，376［行行子（ギョギョシ）］6-459，18-393，394，11-417，168，22-114，115［片葉の蘆］5-109，9-117，27-355，356，359，362［三角は飛ぶ］21-316，404［チマキ（粽・茅巻）］1-370，5-128，181，13-295，18-147，23-269，30-147［茅の輪］7-425，8-395［津島］4-402［津島牛頭天王社］13-436［津島神社］4-400，401，9-187，11-425［津島（の）天王］4-339，403，11-230，20-66，27-256，30-273，276［ハマ矢（破魔矢）］25-304，29-526［ユヒ（結）］14-179，212，255，300，15-250，353，16-187，326，327，333，355，357，406，419，427，17-192，21-321，322，323，328，415，418，24-113，381，423，30-430［ヨシカドリ］6-455［剖葦（ヨシキリ）］3-142，18-393，394，22-114，115，116，119，169［吉田（地名）］3-459，4-326，10-241［吉田（家名）］4-238［吉田氏（姓）］3-470［ヨシハラスズメ］6-199，18-393，394，22-115，116［吉原（静岡県］3-249，250，25-10［吉原（東京）］7-454［吉原遊廓］15-71［蘆花］23-415

**2）西洋**

**a）“reed”のヨシ以外の語義**

①＜詩＞葦笛，牧笛（reed pipe，shepherd's pipe）；牧詩（pastoral poetry）；矢（arrow. cf. “Reeds become darts”：（ヨーロッパでは，ヨシで矢を作ったので）“ヨシが矢となる”は，弱いヨシでも恐ろしい武器になるの意）。②＜音楽＞楽器の舌，舌楽器，有簧（ゆうこう）楽器（“reed instrument”，“the reeds”，管弦楽団の舌楽器部）。③（織機の）おさ（筬），織物の横糸を押え，縦糸を分離させる製織用具。おさの目（歯）。④長さの

単位（“聖書語句”の項参照）。⑤（＝reeding）リージ（ディ）ング。＜建築＞胡麻殻繰形（ごまがらくりがた）（柱・壁・家具などの表面に，ヨシを並べたように平行して細かく施された溝），またそのような装飾。；＜工学＞硬貨やメダルなどの縁につけられるような多数の細かい波形の縦溝，またその細工。⑥（動詞として）屋根を葺く，楽器に舌をつける，リージング（胡麻殻繰形）にする（飾る）。⑦（形容詞reedyとして）ヨシの生い茂った，ヨシ製の，ヨシのようにか細くひょろひょろした（～boy），（舌楽器の音のように）きしり声の（～voice）。

**b）アシ（ヨシ）とカシの木**

①フラー（T. Fuller：英国）の言葉。[Oaks may fall, when Reeds stand the Storm] 嵐がくれば，カシの木は倒れるが，葦は立っている，“柔よく剛を制す”のたとえ。②英詩の父・チョーサー（G. Chaucer）の「トロイルスとクリセイデ（Troilus and Criseyde, II」中の言葉。[And reed that boweth down for every blast full lightly, cease winds, it will arise ; but so will not an oak when it is cast.] 一陣の風で，いとも簡単に倒されてしまう葦も，風が止めば元に立ち直る。しかし，なぎ倒されたカシの木はそうはいかない」③フランスの詩人，ラ・フォンテーヌ（J. de La Fontaine）の寓話集「ファーブル（les Fables）」の中に“カシの木とアシ”の話がある。

**c）聖書語句**

旧約・新約聖書にヨシ（パピルス，カミガヤツリ，ガマ（bulrush）との判別は困難）がしばしば登場することは，聖書語句に関する多数の参考書にみられるが，ここでは主に「英文学のための動物植物事典」（ミルワード，1990）の記載内容を中心に，“聖書のヨシ”について述べる。①旧約聖書で，赤子のモーゼが隠されていた場所は葦の間であった（“葦舟”の項参照）。②「ヨブ記」40：21 [he lieth − in the covert of the reed and fens]（鰐，あるいはベヘモット（Behemoth）も），これは葦のしげみ，または沼に − 隠れている。③葦は，聖書では弱さや頼りなさの象徴。＜例＞「イザヤ書」36：6 [Lo, thou trust est in the staff of this broken reed, on Egypt]（イザヤは，彼の民がエジプトを頼みとすることを警告して，）見よ，あなたがたは折れかけている葦の杖，エジプトを頼みとしている（筆者注．[bruised reed（傷んだ葦）＝broken reed（折れた葦）] あてにならぬ人や物の譬え。“lean on a reed”，当てにならない人（物）に頼る）。「エゼキエル書」29：6 [They have been a staff of reed to the house of Israel]（同じ様にエジプト人について，）彼らはイスラエルの家に対して葦の杖であった。④「イザヤ書」42：3 [A bruised reed shall he not break, and the smoking flax shall he not quench]（イザヤは，救世主である下僕を，）傷ついた葦を彼は折ることなく，煙っている灯心を消すことない（cf.「マタイ伝」12：20）。⑤「マタイ伝」11：7 [What went ye out into the wilderness to see? A reed shaken with the wind ?)]（イエスは，洗礼者ヨハネのことを述べる時も，葦を引き合いに出し，）あなたがたは何を見に荒野へきたのか。風に揺らぐ葦なのか（筆者注．[reed shaken（swayed）by（with）the wind] 風の吹くままにそよいで揺らぐ葦，力ある者のいうままになる定見のない人のたとえ（cf.「ルカによる福音書」7：24））。⑥聖書では，葦は物差しとしても用いられている。旧約聖書ではエゼキエルが，“測りざおを持った人（a man with a measuring rod）”の測量する新しい神殿の幻示を述べているし（「エゼキエル書」40：42），また新約聖書の「ヨハネの黙示録」21：15でも，“金の測りざお（a golden reed）”をもった天使が，新しいエルサレムを同じように測っている（筆者

注. reedは，古代ヘブライの長さの単位で6キュービット（1cubit≒17〜21インチ）に相当（「エゼキエル書」40：5））。⑦葦はキリストの受難の物語で二度触れられている。先ずは，兵士がイエスを嘲弄して“イエスの右手に葦の棒（a reed in his right hand)”を持たせたとある偽りの権杖（「マタイ伝」27：29)。次は葦の棒で，後にイエスが十字架にかけられるとき，彼らは取り出した海綿に酢い葡萄酒を含ませ，“それを葦の棒につけて彼に飲ませようとした（and put it on a reed, and gave him to drink)”（「マタイ伝」27：48)。⑧[Reed (Red, Read) Sea] 葦の海，紅海，アカバ湾（「出エジプト記」10：19, 13：18, 15：4，ほか)。⑨葦舟：“これは走ること葦舟のごとく，”（「ヨブ記」9：26)。

**d) ドイツの比喩・諺**

ヨシのドイツ語：Rohr = Schilf = Schilfrohr。①[einen beschrankten Horizont (Gesichtskreis) haben]＜諺＞葦の髄（管）から天上を覗く（見る)。②[Rohr] (1) “sich auf ein schwaches 〜 stutzen”，＜比喩＞信頼できない人（物）を信頼する。(2) “wie ein schwankendes 〜 im Wind sein”，＜比喩＞風にそよぐアシのようである，優柔不断の譬え。(3)＜卑語＞陰茎，男根。用例：“ein 〜 verlegen”，性交する；“sich das 〜 verbiegen”，性病をうつされる；“jn. auf dem 〜 haben”，〜のことを思うと欲情を覚える。(4)＜卑語＞膣，ワギナ。④[Rohrsanger = Schilfrohrsanger] (1)ヨシキリ (cf. Sanger：(1)歌手 (2)＜比喩＞囀る鳥)。⑤[Rohrspatz = Rohrsperling] (1)オオヨシキリ。(2) “wie ein 〜 schimpfen”，＜比喩＞興奮して罵りわめく。

**e) 考える葦**

“人間は考える葦である”は，フランスの哲学者・数学者・物理学者であったパスカル（Blaise Pascal；1623-1662）が，キリスト教護教論のために生前書きためた断章の集成「パンセ（Pensees)」（著者の没後1670年刊）の中に出ているあまりにも有名な言葉であるが，これについては，前田（1968）がその著「パスカル-考える葦の意味するもの」（中公新書）において詳細に論考している。以下は，同書の“はじめに”からの引用である：（断章347)「人間はひと茎の葦にすぎない。自然のなかでもっとも弱いものである。だが，それは考える葦である。（筆者挿入．原文：L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature ; mais c'est un roseau pensant.）彼をおしつぶすために，宇宙全体が武装するにはおよばない。蒸気や一滴の水でも彼を殺すのに十分である。だが，たとえ宇宙が彼をおしつぶしても，人間は彼を殺すものより尊いだろう。なぜなら，彼は自分が死ぬことと，宇宙の自分に対する優勢とを知っているからである。宇宙はなにも知らない。だから，われわれの尊厳のすべては，考えることのなかにある。われわれはそこから立ち上がらなければならないのであって，われわれが満たすことのできない空間や時間からではない。だから，よく考えることを努めよう。ここに道徳の原理がある。」。（断章348)「考える葦。私が私の尊厳を求めなければならないのは，空間からではなく，私の考えの規整からである。私は多くの土地を所有したところで，優（まさ）ることにならないだろう。空間によっては，宇宙は私をつつみ，一つの点のようにのみこむ。考えることによって，私が宇宙をつつむ。」。上は，パスカルが（略)「考える葦」について記した二断章の全訳である。（略)。パスカルと言えば「考える葦」，「考える葦」と言えばパスカルをすぐ思うほど，両者は深く結びついているが，その結びつきは，合わせてわずか一頁になるかならない，この二つの短文によるだけなのである。パスカルがその三十九年の生涯で，言い残し，書き残したすべての記録をあさっ

ても，「考える葦」という表現は，他には見当らない。(略)。ヴィクトール・ジローは，始めの断章の前半を評して，「パスカルがその全生涯においてこの数行だけしか書かなかったとしても，それだけで彼を大作家の列に加えるのに十分であっただろう」とまで記している。この二つの短文の意味するところは，いちおう明らかであって，物体としては弱い人間の，思考による尊厳を美しい言葉で説いたものであるにちがいない。その美しさに感傷的に酔うだけなら，この1頁で足りるわけである。しかし，この短い文章の持つ独特の意味を，その深さと，複雑さと繊細さとにおいて十分くみとるためには，パスカルが，直接の説明をこれ以外には加えてくれなかった以上，彼の全生涯，全著作を探って，それを試みるほかはない。

＜付記＞

**「仏和大辞典」**(伊吹・渡邊ほか。1981) の“葦：roseau (複数形；～x [rozo])”の項に記載されている“考える葦”以外のフランスの比喩・諺の例：(1) [personne frele comme un ～] あしのように脆弱な人。(2) [～ peint en fer] (廃語) 外見は強そうでも根は気の弱い人。(3) [s'appuuyer sur un ～] 当てにならぬものに頼る。(4) [Cest un ～ qui pile a tous vents。] あの人はわずかな圧力にでもすぐ屈服してしまう。

## おわりに

本稿を草する当たっては，許された紙幅内で，“ヨシと人の暮らしとの係わり”につき，できる限り多くの事項を盛り込むように心掛けた。このため，読みづらい文章，見にくい構成になってしまったが，ご寛容賜りたい。今まさに滅び行かんとしているヨシ原が，かっては人間の営みといかに密接に係わっていたかを，いささかなりとも拙文から汲み取って頂ければ，筆者にとり望外の幸せである。豊かなヨシ原を甦らせるのは，たしかに至難の技といえる。しかし，幸い，“人間は考える葦”である。人間の叡知をもってすれば，必ずや再び“豊葦原”を取り戻せると信じている。そのためには，個人個人が“葭の髄から天井を覗く”のではなく，今回の国際ワークショップのように，異分野の専門家・研究者が，それぞれの視点からこの難題に協同して取り組むことが，何より肝要であると考える。

## 引用文献


愛知大学中日大辞典編纂処 (編集). 1987.「中日大辞典」(増訂第二版). 大修館書店，東京.

安藤邦広. 1983.「茅葺きの民俗学」. はる書房，東京.

BB. (神鳥統夫訳). 1984.「あなぐまビルのぼうけん　5. あしのささやき号」. 大日本図書 (株)，東京.

ブランスキル，R. W. (片野　博訳). 1985.「イングランドの民家」. 井上書院，東京.

深津　正. 1983.「灯用植物 (ものと人間の文化史 50)」. 法政大学出版局，東京.

服部健三・近藤　信. 1935.「食用植物学」. 南山堂書店，東京.

ヘイエルダール，T. (永井　淳訳). 1971.「葦舟ラー号航海記」. 草思社，東京.

フルスカー，ヤン. (坂崎乙郎・高儀　進訳). 1978.「ヴァン・ゴッホ全画集　1，2，3」. 講談社，東京.

伊吹武彦，渡邊明正，後藤敏雄，本城格，大橋保夫 (編集). 1981.「仏和大辞典」. 白水社，東京.

池田書店 (編集). 1990.「花ことば」. 池田書店，東京.

今津町教育委員会 (編集). 1980.「葦海の足音」

（ふるさと近江伝承文化叢書）サンブライト出版，滋賀.
石田潤一郎（山田幸一監修）. 1990.「屋根のはなし」. 鹿島出版会，東京.
居初庫太. 1986.「カラー版花の歳時記」. 淡交社，東京.
海音寺潮五郎. 1975. 石田三成.「武将列伝五」.（株）文芸春秋，東京.
鏡味完二・鏡味明克. 1978.「地名の語源」. 角川書店，東京.
金井弘夫（編集）. 1991.「日本地名索引上・下巻」. アボック社，東京.
金井典美. 1977.「湿原祭祀第2版（ものと人間の文化史24）」. 法政大学出版局，東京.
金氏脩介. 1993. 葦のデザイン. 嵯峨美術短期大学紀要，第19号：25-48.
加藤憲一. 1976.「英米文学植物民俗誌」. 冨山房，東京.
川島宙次. 1973.「滅びゆく民家－屋根，外観」. 主婦と生活社，東京.
————. 1987.「絵でみるヨーロッパの民家」. 相模書房，東京.
————. 1990.「世界の民家－住まいの創造」. 相模書房，東京.
————. 1992.「美しい日本の民家（1）」.（株）ぎょうせい，東京.
小林梅次. 1984.「日本の草屋根」. 相模書房，東京.
小松　欽. 1989.「葦の詩；スペイン篇，日本篇」. 彩流社，東京.
前田陽一. 1968.「パスカルー考える葦の意味するもの」（中公新書）. 中央公論社，東京.
増田靖弘（編集代表）. 1989.「遊びの大事典」. 東京書籍，東京.
増本喜久子. 1968.「雅楽；伝統音楽への新しいアプローチ」. 音楽之友社，東京.
ミルワード・P.（中山　理訳）. 1990.「英文学のための動物植物事典」. 大修館書店，東京.
三浦　譲（編纂）. 1977.「全国神社名鑑（上巻）」. 全国神社名鑑刊行会史学センター，東京.
森　章司. 1987.「仏教比喩例話辞典」，東京堂出版，東京.
諸藤浩之. 1996.「葦ペンスケッチのすすめ」. 日貿出版社，東京.
中野好夫. 1972.「蘆花徳富健次郎第一部」. 筑摩書房，東京.
那須　浩（編集）. 1987.「早わかり食べられる山野草12か月（生活シリーズ74）」. 主婦と生活社，東京.
日本ユニバック株（編集）（丹羽基二（監修））. 1978a.「日本の苗字表音編」. 日本ユニバック株，東京.
————.（丹羽基二（監修））1978b.「日本の苗字表記編」. 日本ユニバック（株），東京.
西田成夫・サライ編集部（編集）. 1997.「素朴な温かさに浸る茅葺きの宿」. 小学館，東京.
日外アソシエーツ株（編集）. 1985a.「現代日本地名よみかた大辞典4（7-9画）」. 紀伊国屋書店，東京.
————. 1985b.「現代日本地名よみかた大辞典6（12-29画）」. 紀伊国屋書店，東京.
————. 1988.「名前から引く人名辞典」. 紀伊国屋書店，東京.
————. 1989.「神社，寺院名よみかた辞典」. 日外アソシエーツ株，東京.
————. 1990.「日本の姓名よみふり辞典姓の部」日外アソシエーツ株，東京.
————. 1994,「号・別名辞典近代・現代」. 紀伊国屋書店，東京.
————. 1998.「新訂現代日本人名録98　1. あ～かと」. 紀伊国屋書店，東京.
日塔和彦. 1983. 屋根葺き（茅葺きを中心として）.

「講座，日本技術の社会史，第７巻」．日本評論社，東京．
額田　巌．1984．「垣根（ものと人間の文化史52）」．法政大学出版局，東京．
小川　豊．1987．「災害と植物地名」．山海堂，東京．
小原　啓．1973．「葦船の冒険野郎；ラーII世号航海記」．毎日新聞社，東京．
大久保忠国・木下和子．1991．「江戸語辞典」．東京堂出版，東京．
佐藤英文・佐藤邦昭．1993．「草笛を楽しむ（シリーズ親と子でつくる20）」．創和出版，東京．
瀬木貴将．1999．CD「シレンシオ～静寂」．ポリグラム（株），東京．
鈴木　公．1980．「葦舟チグリス号大航海－古代文明の謎」．日本テレビ放送網株，東京．
上海科学技術出版社・小学館（訳編）．1985．「中薬大辞典」（全五巻）．小学館，東京．（原書：江蘇新医学院（編集）．1977-1978．「中葯大辞典」（上冊，下冊，附編）」．上海科学技術出版社，上海．
柴田桂太．1957．「資源植物事典（増補改訂版）」．北隆館，東京．
柴田武・谷川俊太郎・矢川澄子（編集）．1984．「世界なぞなぞ大事典」．大修館書店，東京．
志賀　剛．1989．「神名の語源辞典」．思文閣出版，東京．
下中弥三郎（編輯）．1990．「神道大辞典」．臨川書店，東京．
白川　静．1984．「字統」．平凡社，東京．
尚学図書（編集）．1982．「故事・俗信ことわざ大辞典」．小学館，東京．
杉本尚次．1974．「日本民家探訪－民俗・地理学的考察」．創元社，東京．
堀田　満・緒方　健・新田あや・星川清親・柳宗民・山崎耕宇．1989．「世界有用植物事典」．平凡社，東京．
高信幸男．1993．「難読稀姓辞典」．日本加除出版株，東京．
瀧井康勝．1990．「366日誕生花の本」．日本ヴォーグ社，東京．
————．1994．「366日相性花の本」．三五館，東京．
田中静一・小川久恵・西澤治彦（編著）；洪　光住（監修）．1991．「中国食物事典」．柴田書店，東京．
千鹿野茂．1993．「日本家紋総鑑」．角川書店，東京．
辻井達一．1987．「湿原－成長する大地」．中央公論社，東京．
内山正一．1987．「工作倶楽部ミニチュア民家園」．山海堂，東京．
Wilson, A. W. 1966. Soviet pushing reed pulp on Black and Caspian Seas. Pulp and Paper, 31-40.
矢野道雄・杉田瑞枝（訳注）．1995．「占術大集成1，2」（東洋文庫589，590）．平凡社，東京．（ヴァラーハミヒラ（Varahamihira）原著「ブリハット・サンヒター（Brhatsamhita）」の訳注書）．
吉田靖他．1981．「茅屋根と茅壁」．学習研究社，東京．
吉川　守・NHK取材班（編集）．1990．「メソポタミア，文明の誕生；NHK大英博物館1．」．日本放送出版協会，東京．
吉村作治・NHK取材班（編集）．1990．「エジプト大ファラオの帝国；NHK大英博物館2．」．日本放送出版協会，東京．